

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集

ふるさと農道整備事業に伴う確認調査報告書

MINAMISAKODA-SITE

南迫田遺跡

1994年3月

鹿児島県指宿市教育委員会

序 文

本書は、周知の埋蔵文化財包蔵地「南迫田遺跡」において、行われた遺跡確認調査の成果をまとめたものです。

調査成果の主なものを挙げますと、まず、縄文時代から現代に至る出土品がございます。このことにより、南迫田遺跡の東側に位置します国指定史跡指宿橋牟礼川遺物包含地と同じような長い期間にわたる人々のくらしの痕跡が分かりました。

また、指宿市では初見となる中世の道、掘立柱建物跡、杭穴、溝状遺構等が検出され、今まで未解であります中世の集落の姿が一部でございますが垣間見ることが出来ました。

さらに、白鳳年間に建立された正平山光明寺が所存していたとされている周辺からは、柱材が一部炭化した状態で残っている柱穴が検出されました。指宿市内での最古の廃寺に関連すると考えられる施設がこの周辺にあった可能性があります。

なお、南迫田遺跡周辺に古墳時代の集落が広がっていることも分かりました。

この確認調査によって、南迫田遺跡の価値が認識されると同時に、本書が皆様に活用され、将来に守り伝えられるべき遺跡の適切な保存に役立てられることを願ってやみません。

この確認調査に御協力を賜りました鹿児島県耕地事務所の皆様、そして諸機関の先生方をはじめ、御協力を頂いた関係各位および地元の方々に対して厚く御礼を申し上げます。

平成6年3月31日

指宿市教育委員会教育長 中 村 利 廣

例　　言

1. 本発掘調査報告書は、平成5年10月19日から平成5年12月22日まで実施した、鹿児島県指宿市十町南追田に所在する南追田遺跡における遺跡確認調査報告書である。
2. 本発掘調査の費用3,746千円は鹿児島県耕地事務所が2,884,420円を、指宿市が861,580円を負担した。
3. 本発掘調査及び整理・報告書作成は指宿市教育委員会が実施し、発掘調査は下山覚、中摩浩太郎、渡部徹也、鎌田洋昭が担当した。
4. 整理・報告書作成は下山覚、鎌田洋昭が主に実施し、遺構、遺物の原図作成・整図については、その責を明らかにするために目次に作成者名を記す。なお、原図作成者をⒶ、トレース実施者をⒷと表記する。
5. 写真撮影及び図版作成者は、現場関係を鎌田洋昭が、遺物関係を下山覚がこれを行った。
6. 本書の執筆・編集は下山覚、鎌田洋昭が行った。
7. 本書中のレベルはすべて絶対高である。
8. 本書中の土層、遺物の色調名及び表記は「標準土色帖」1990年版に基づく。
9. 遺物実測図No.、写真No.、文中のNo.は一致する。
10. 遺物出土状況図のNoと遺物実測図No.、写真No.とは整合性は無く、出土遺物観察表の取り合げNoと合致する。
11. 遺物観察表、実測図、遺構図の表記凡例は「橋牟礼川遺跡Ⅲ」(1992、指宿市教育委員会)に準じる。
12. 付図の南追田遺跡のトレンチ配置図の原図となった地形測量図は、鹿児島県耕地事務所から御協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。

目 次

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第1節 確認調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	2
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	3
第Ⅲ章 確 認 調 査	5
第1節 遺跡の層序	5
第2節 2トレンチの調査	7
第3節 3トレンチの調査	13
第4節 4トレンチの調査	20
第5節 5トレンチの調査	26
第6節 6トレンチの調査	31
第7節 7トレンチの調査	33
第8節 8トレンチの調査	37
第9節 9トレンチの調査	43
第10節 10トレンチの調査	46
第11節 11トレンチの調査	49
第Ⅳ章 調査の成果について	51

挿 図 目 次

第1図	調査地点位置図(S=1/25,000) (⑥鎌田⑥鎌田)	3
第2図	発掘調査地点および周辺図 (S = 1 / 5,000) (⑥鎌田⑥鎌田)	4
第3図	各トレンチ層位模式図 (⑥鎌田⑥鎌田)	6
第4図	2トレンチ北壁土層断面図 (S = 1 / 40) (⑥鎌田⑥鎌田・上高原・清・新小田)	8
第5図	2トレンチ第5層検出遺構平面図・遺物出土状況図 (S = 1 / 40) (⑥鎌田⑥同上)	10
第6図	2トレンチ第10層検出状況図・ 第13・14層遺物出土状況図 (S = 1 / 40) (⑥鎌田⑥同上)	11
第7図	2トレンチ出土遺物実測図北壁土層断面図 (S = 1 / 3) (⑥下山⑥下山)	12
第8図	3トレンチ東壁・南壁土層断面図 (S = 1 / 40) (⑥鎌田⑥鎌田・上高原・清・新小田)	14
第9図	3トレンチ第6層検出遺構平面図 (S = 1 / 20)・ 遺物出土状況図 (S = 1 / 40) (⑥鎌田⑥同上)	15
第10図	3トレンチ第8層遺物出土状況図・ 第10層直上検出状況図 (S = 1 / 40) (⑥鎌田⑥同上)	16
第11図	3トレンチ第13層遺物出土状況図・ 第14層検出遺構配置図 (S = 1 / 40) (⑥鎌田⑥同上)	17
第12図	3トレンチ出土遺物実測図① (S = 1 / 3) (⑥下山⑥下山)	18
第13図	3トレンチ出土遺物実測図② (S = 1 / 2) (⑥下山⑥下山)	19
第14図	4トレンチ北壁・西壁土層断面図 (S = 1 / 40) (⑥鎌田⑥鎌田・上高原・清・新小田)	20
第15図	4トレンチ第5層遺物出土状況図・ 第7層遺物出土状況図 (S = 1 / 40) (⑥鎌田⑥同上)	21
第16図	4トレンチ第9層遺物出土状況図・ 第10層遺物出土状況図 (S = 1 / 25・1/50) (⑥鎌田⑥同上)	22
第17図	4トレンチ第9層検出土壤平面位置図 (S = 1 / 40) (⑥鎌田⑥同上)	23
第18図	4トレンチ出土遺物実測図 (S = 1 / 3) (⑥下山⑥下山)	24
第19図	5トレンチ北壁・東壁土層断面図 (S = 1 / 40) (⑥鎌田⑥鎌田・上高原・清・新小田)	27
第20図	5トレンチ第3層遺物出土状況図 (S = 1 / 40) (⑥鎌田⑥同上)	28
第21図	5トレンチ第4層検出遺構配置図 (S = 1 / 20) (⑥中摩・鎌田⑥同上)	29
第22図	5トレンチ出土遺物実測図 (S = 1 / 3) (⑥下山⑥下山)	30
第23図	6トレンチ北壁土層断面図・第7層検出遺構配置図 (S = 1 / 40) (⑥鎌田⑥鎌田・上高原・清・新小田)	32
第24図	7トレンチ北壁・東壁土層断面図・ 第10層遺物出土状況図 (S = 1 / 40) (⑥鎌田⑥同上)	34
第25図	7トレンチ出土遺物実測図 (S = 1 / 3) (⑥下山⑥下山)	35
第26図	8トレンチ南壁・西壁土層断面図 (S = 1 / 40) (⑥鎌田⑥鎌田・上高原・清・新小田)	38

第27図	8トレンチ第5・6層遺物出土状況図・ 第8~13層遺物出土状況図(S=1/40)(@鎌田@同上)	39
第28図	8トレンチ出土遺物実測図①(S=1/3) (@下山@下山)	40
第29図	8トレンチ出土遺物実測図②(S=1/3) (@下山@下山)	41
第30図	9トレンチ南壁・東壁土層断面図・ 第6層検出遺構配置図(S=1/40) (@鎌田@鎌田・上高原・清・新小田)	44
第31図	9トレンチ出土遺物実測図(S=1/3) (@下山@下山)	45
第32図	10トレンチ北壁・西壁土層断面図・ 第10層遺物出土状況図(S=1/40) (@鎌田@鎌田)	47
第33図	10トレンチ出土遺物実測図(S=1/3) (@下山@下山)	48
第34図	11トレンチ南壁・西壁土層断面図(S=1/40) (@鎌田@鎌田)	49
第35図	11トレンチ出土遺物実測図(S=1/3) (@下山@下山)	50
附図	トレンチ配置図(S=1/1,000) (@県耕地事務所@鎌田)	

表 目 次

第1表	2トレンチ出土遺物観察表	12
第2表	3トレンチ出土遺物観察表	19
第3表	4トレンチ出土遺物観察表	25
第4表	5トレンチ出土遺物観察表	30
第5表	7トレンチ出土遺物観察表	36
第6表	8トレンチ出土遺物観察表①	41
第7表	8トレンチ出土遺物観察表②	42
第8表	9トレンチ出土遺物観察表	45
第9表	10トレンチ出土遺物観察表	48
第10表	11トレンチ出土遺物観察表	50

図 版 目 次

図版1	2・3・4トレンチ調査状況	55
図版2	5・6・7トレンチ調査状況	56
図版3	8・9・11トレンチ調査状況	57
図版4	2・3・4トレンチの出土遺物	58
図版5	5・7トレンチの出土遺物	59
図版6	8トレンチの出土遺物	60
図版7	9・10・11トレンチの出土遺物	61

第Ⅰ章 調査に至る経緯

第1節 確認調査に至る経緯

平成5年度に指宿市教育委員会は、指宿市南追田地区において文化財確認調査を行った。以下は、これに至る経緯である。(電話連絡等、日時について不明瞭なものは「初旬」等で表現した。)

- 6月初旬 ・市耕地課から6月22日に、県文化課による現地踏査が行われるため、同行の依頼。
- 6月22日 ・県文化課担当2名来訪。市内南追田地区において踏査を行う。同行者：県耕地事務所1名、市耕地課1名、市教委2名。現地で、多数の遺物の散布を確認。
- 同日午後 ・市耕地課において協議。事業内容等の説明を受け、事後にに関して打合せを行う。
事業名称：ふるさと農道緊急整備事業（自治省統括起債事業）
事業主体：県耕地事務所
事業内容：農道新設事業（全長660m、工事対象予定幅員7~20m）
事業時期：平成5年度~6年度（平成5年度中に着工、6割程度完工予定）
・県文化課、正式に調査の有無の回答を出すこと。
・県文化課より確認調査を市教委で担当し、場合によっては本調査までとの指導。
・市教委、他事業に伴う調査他で対応困難の旨伝え、指導を仰ぐ。
・県文化課、対応不可能のこと。市教委で担当することに決定。
- 6月30日 ・市教委、南追田地区の再踏査。過去の表採報告等の調査。
- 7月初旬 ・市教委、上記の結果と6月22日の踏査の結果に基づき、遺跡発見届（法57条の3）を県文化課へ提出。事業対象地域全域を「南追田遺跡」とする。
- 7月20日 ・市耕地課と、事業内容の再確認と、確認調査の時期等について協議。具体的には四者協議を持つことで合意。調査計画作成依頼を受ける。
- 7月末日 ・県文化課より正式回答の受理。事業区域の7割が遺跡地のこと。
- 8月2日 ・市耕地課と協議。確認調査範囲について、県文化課回答の範囲でとのこと。
・市教委、工事中発見等のトラブル防止のためと回答。確認調査概算書提出。
- 8月6日 ・県耕地事務所、市耕地課と協議。確認調査範囲と費用について。県文化課回答との相違及び、調査費用が県文化課提示基準より多大のこと。
・市教委、事情を説明(工事中発見等の防止)。費用に関しても、複数文化層想定と説明。一応了解得る。他に、委託契約形態、調査区設定の際の立ち会い等打ち合わせ。
- 8月10日 ・市耕地課より、調査範囲と費用の件で疑議が提示。
・市教委、県文化課に指導を仰ぐ。県文化課、「57条6の範囲で行うこと。調査費の基準提示は行っていない。各地域の実情に応じ行うこと。」とのこと。
- 8月18日 ・市耕地課へ県文化課指導内容を伝達。了解される。一方、「調査費の23%は、市教委で負担してほしい。」とのこと。
・県文化課、県耕地事務所へ上記の件について確認。
・市教委で23%の負担はなしとの回答。市耕地課へ伝え承を得る。
- 8月26日 ・市耕地課へ作業員確保と調査予定地借り上げに関する協力を要請。「兩期災害の事

- 後処理のため十分協力できない」と回答。市教委で地権者交渉開始。
- 9月24日 · 県耕地事務所より見積書提出依頼。市教委調査費総額、3,746,000円が提出。
 - 9月28日 · 指宿市議会 9月補正予算議決。(調査費上記のとおり)
 - 10月15日 · 地権者との土地貸借契約締結。
 - 10月18日 · 作業員への説明会実施。於：南追田公民館
 - 10月19日 · 確認調査開始
 - 10月26日 · 県耕地事務所事務官より連絡。見積金額変更の依頼。市教委側で調査費の23%負担のこと。市教委担当、これまでの経緯説明するが、県は77%のみの負担。
 - 10月27日 · 調査費77%の額で見積書再提出。見積金額2,884,420円（消費税込み）で提出。
 - 11月16日 · 県耕地事務所長と指宿市長とで、委託契約の締結。

なお、確認調査は当初の予定通りほぼ2ヶ月で完了した。この結果、調査区全域が、縄文時代～中世の複合遺跡の包含地であることを確認した。確認調査途中の12月10日、こうした事情を踏まえ、県耕地事務所・市耕地課との協議を行った。両者からは、簡易舗装で調査なしの要望が出されたが、市教委では、制度上、県文化課へ結果報告を提出し、指導を受ける必要がある旨伝えるとともに、文化財保護法第57条の3に基づく通知の提出を依頼した。平成6年2月14日付で、これに対する回答が県文化課より出された。内容は「周知の包蔵地のため工事着年前に発掘調査を実施してください」というものであった。

第2節 調査の組織

発掘調査の組織は以下のとおりである。

発掘調査主体	指宿市教育委員会	
発掘調査責任者	指宿市教育委員会教育長	中村 利廣
発掘調査担当者	指宿市社会教育課長	篠原 慶吾
	指宿市社会教育課長補佐	山澤 郁夫
	指宿市社会教育課 派遣社会教育主事	塙入 俊実
	指宿市社会教育課文化係長	今村 新作
	指宿市社会教育課主査	久保憲一郎
	指宿市社会教育課主事	弓指 恒子
発掘調査員	指宿市社会教育課主事	下山 覚
	同 上	中摩浩太郎
	同 上	渡部 徹也
	指宿市社会教育課嘱託	鎌田 洋昭
発掘調査作業員	有里ユキエ、有里 誠、今柳田辰雄、追立節子、新小田千恵子、大坂恵子 田爪和子、中川路あさ子、中間清子、永山ひとみ、東屋敷雅、山下すみ江 吉富 功	
整理作業員	上高原信子、清 秀子、新小田香代子、徳留逸子、前田恵子	

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境⁽¹⁾

指宿市は、九州本土薩摩半島の最南端に位置する市である。地形的には山地、台地、平野、湖沼と大きく4つに分けられる。中でも、九州最大のカルデラ湖である池田湖は、今から約5,500年前に活動し、その火山性噴出物は指宿地方の地形的形成的一大要因となっている。また、指宿市と南接する開聞町にトニコロイデ型の開聞岳が位置している。その活動は有史以来、「日本三代実録」等に記載があり、降下した火山性噴出物は非常に硬く固結しており、広くこの地方を覆っている。

開聞岳を起源とするテフラは、黄コラ（縄文時代後期）、暗紫コラ（弥生時代中期末）、青コラ（7世紀最終四半期）、紫コラ（西暦874年3月25日）等が代表的であり、降下当時の集落が、少なからずとも被害があったと考えられる。

南迫田遺跡は、池田湖の東側外輪山の東端山裾に位置しており、山からの土砂流出供給源の側である為、上記の開聞岳を起源とするテフラの二次堆積が厚く堆積している。また、山裾という立地条件である為、山からの湧き水等が流水する小河も周辺に多く認められる。いわゆる火山性噴出物や土砂流出物等の、それらの二次堆積層上に立地し、山裾から海岸へ傾斜する火山性肩状地の西奥に位置する。海抜は16.0～24.5mを測る。

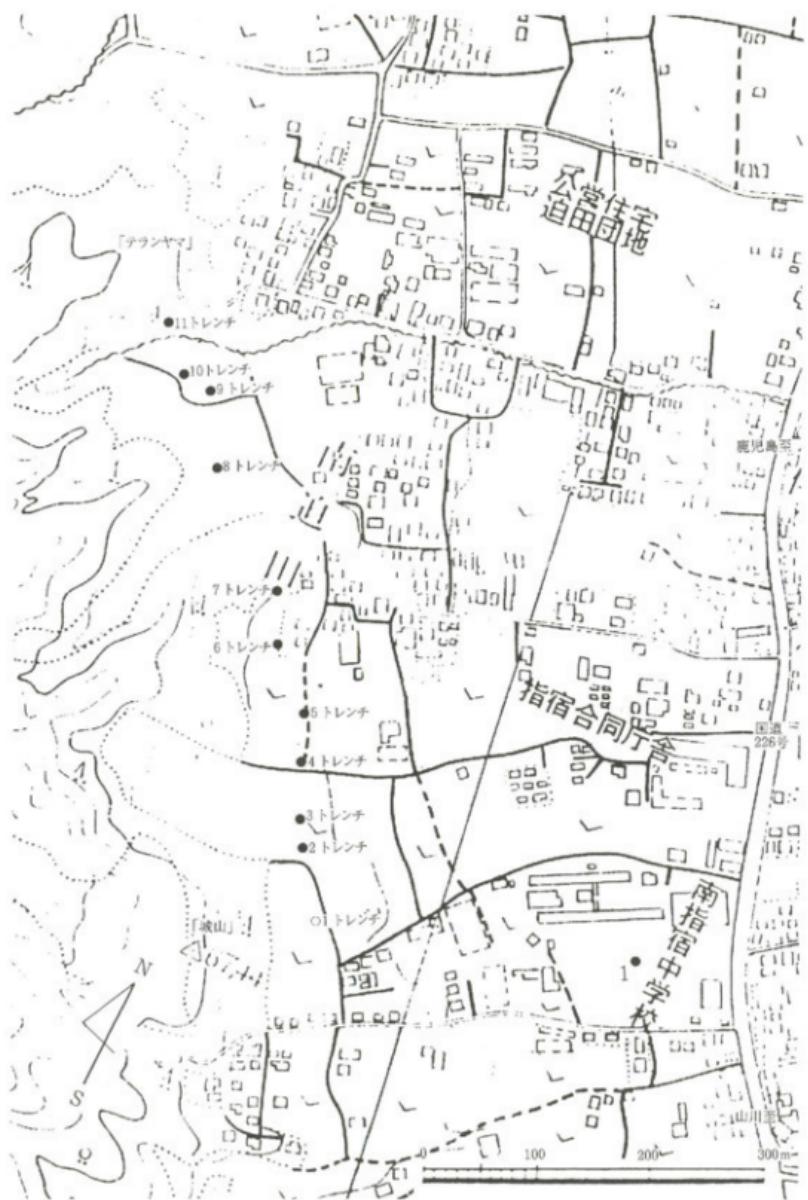
南迫田遺跡周辺には、坂瀬ノ上遺跡、柳田遺跡、上玉利遺跡等が隣接している。⁽²⁾（文責 錄田）

(1) 指宿市教育委員会「第Ⅰ章 遺跡の立地と環境」「橋本礼川遺跡Ⅲ」1992を一部改変。

(2) 指宿市誌編さん室「第2編 指宿市の歴史」1985



第1図 調査地点位置図 (S = 1/25,000)



1：南指宿中学校地(坂瀬上)遺跡 ○は未調査地点

第2図 発掘調査地点および周辺図 (S=1/5,000)

第Ⅲ章 確認調査

第1節 遺跡の層序

ふるさと農道整備事業に伴う南追田地区の確認調査において、2~11トレンチの10ヶ所の調査地点を約50m毎に設定し、層序の確認と遺物包含層の探査を行った。(附図を参照)

確認調査を行うにいたり、現在、国指定史跡指宿橋牟礼川遺物包含地の周辺の発掘調査の成果に基づく「橋牟礼川遺跡基準層序」を参考として南追田地区確認調査で検出された層の時代、時期的判断を行った。実際に、橋牟礼川遺跡周辺で確認されている開聞岳の火山灰(通称、「紫コラ」、「青コラ」、「暗紫コラ」)が厚く堆積していることが分かり、その火山灰層の上下層の時期の把握に大きな成果を上げることが出来た。なお、橋牟礼川遺跡基準層第4層から対比できる層が確認出来た。

よって、南追田地区の確認調査における層序の説明については、橋牟礼川遺跡の基準層序を中心として述べていくことにする。また、橋牟礼川遺跡周辺で確認されていない層については、そのつどふれていく。

南追田地区の10ヶ所の調査区全てにおいて、地表面から約80cmから最大180cmと山からの土砂流出物堆積層が厚く堆積していることが確認された。

橋牟礼川遺跡基準層序第4層：中世の黒色帶層であり、2~8トレンチで確認された。遺物包含層であり多数の遺物を出土するとともに、古道、畠跡、柱穴、溝状遺構等がこの層中からつくられている。黒色帶層と「紫コラ」層との間に平安時代層と考えられる粘質層が堆積している。

橋牟礼川遺跡基準層序第5層：貞観16年3月4日(西暦874)の開聞岳の火山性噴出物性積層である。通称「紫コラ」層と呼ばれ、2~8・10トレンチで確認された。20cm~120cmの厚さがある。黒色帶層中から掘り込まれた溝状遺構や柱穴、杭穴もこの「紫コラ」層上面で検出されている。

橋牟礼川遺跡基準層序第6層：奈良、平安時代の遺物包含層である。「紫コラ」が厚く堆積している2~4・6~8トレンチのみで確認された。5トレンチではこの層に対比出来るべき「紫コラ」直下層では川砂利層が確認された。

橋牟礼川遺跡基準層序第7層：7世紀最終四半期頃に比定される開聞岳噴出物堆積層であり、「青コラ」層と呼称されている。3・4・6・8トレンチで層として、2・4・7トレンチではブロックとして確認された。

橋牟礼川遺跡基準層序第8層：古墳時代末頃の遺物包含層である。2~4・6~8トレンチで確認され、4トレンチではこの層より、「並貫式土器」の略完形土器が土圧によりつぶれた状態で出土している。

橋牟礼川遺跡基準層序第9層：粘質土層であり、古墳時代の遺物包含層である。2・3・7トレンチにおいて確認されている。

橋牟礼川遺跡基準層序第10層：弥生時代の遺物包含層であり、この層に対比出来るものとしては3トレンチのみで確認されており、この層中から不定形な土壤が掘り込まれている。

橋牟礼川遺跡基準層序第11層：弥生時代中~後後に降下した開聞岳噴出物堆積層であり、2・3トレンチの両トレンチで確認された。しかし、遺物は出土していない。

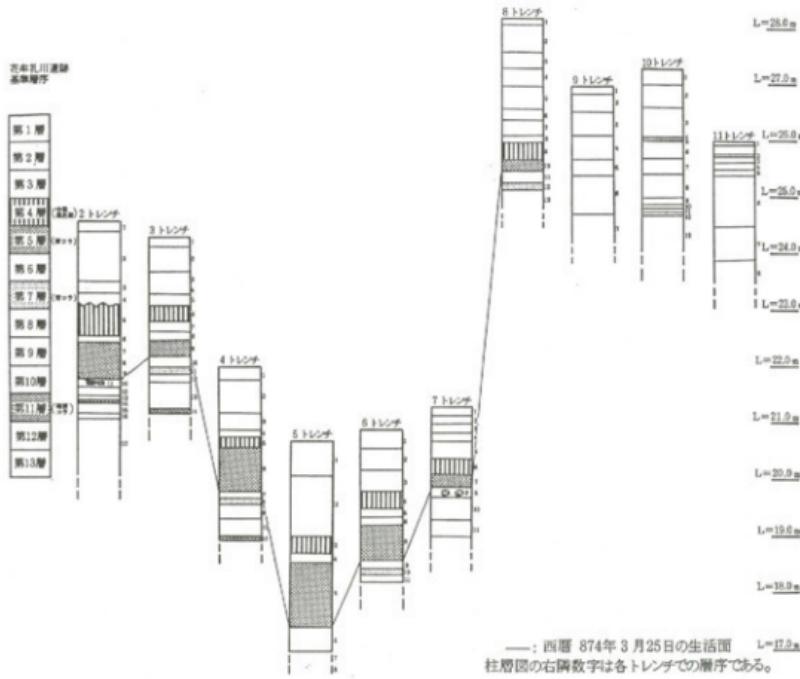
橋牟礼川遺跡基準層序第12層：粘質が非常に強く弥生時代前期から中期の遺物包含層であり、2トレンチのみで確認された。

橋牟礼川遺跡基準層序第19層：約5,500年前の池田カルデラ形成期に伴う軽石層である。9トレンチでこの層の搅乱層（2次堆積層）が厚く堆積しており、この層に掘り込まれている柱穴が確認された。

以上、橋牟礼川遺跡の基準層序を中心に南追田地区の層序を外観してきたが、その結果、層序堆積の違いから区分できそうである。この要因は地形的な違いに基づくものである。

9・10・11トレンチの3調査区内地では、それぞれ共通する層序がなく、また橋牟礼川遺跡基準層序に対比出来る層もない。（10トレンチから「紫コラ」・「青コラ」のシルト層のみが確認された）10トレンチと11トレンチの間を流れる柳田川の両崖観察によると、「紫コラ」の2次堆積が約1.5mも厚く堆積しており、10・11トレンチの層序は「紫コラ」2次堆積以降に堆積したものと推測できる。また、9トレンチで確認された池田軽石の搅乱層も山からの流出による二次堆積と考えられるが、カギ層の検出が出来なかった為時代的見解の把握が不可能であった。9・10・11トレンチ周辺の山からの土砂流出物が複雑に厚く堆積しているものと考えられる。

（文責 錄田）



第3図 各トレンチ層位模式図

第2節 2トレーニングの調査

2トレーニングの調査区設定地は、調査区西側の山裾に位置している。山からの土砂が幾分堆積していると予想されている場所であった為、遺物包含層まで深い場合は拡張を行なながら調査をすすめていく予定であった。当初、 2×2 mの調査範囲であったが、中世の黒色帯（第5層）まで現地表面から1.2m下であった為、 3.5×3.5 mに拡張を行った。

(1) 層位（第4図）

2トレーニングは旧耕作地であったため、軟質の耕作土が厚く堆積していた。

第1層は、旧耕作地層であり、柔らかくサクサクしている。

第2層は、山からの土砂流出の堆積層と考えられるもので、小礫・軽石等を多く含み、層質的にはやや粘質を伴うものである。 $7.5\text{YR}3/2$ 。

第3層は、層質的には第2層と同質であるが、色調で若干、黒みを帯びる。第5層への漸移層的なものと考えられ、第5層の黒色がしみこんだものであろう。 $5\text{YR}2/2$ 。

第4層は、粘質が非常に強く、粒子は細かい。上下層に比べると一段と明るみが強い。 $1.5\text{YR}2/1$ 。

第5層は、横半礼川遺跡基準層序の第4層に対応する。いわゆる中世の黒色帯層であり、若干礫を伴い、やや水気を含む層である。 $7.5\text{YR}2/1$ 。

第6層は、第5層より若干、色調が薄くなる。礫の含有率も減り、粘質も強くなる。

第7層は、第9層の二次堆積層であり、ラミナが発達している。 2mm 大のスコリアの有無で2層に分層でき、無いものを7層a、有るもの7層bとする。

第8層は、軟質でサクサクしており、若干の礫を伴う。 $10\text{YR}2/2$ 。

第9層は、貞觀16年3月4日（西暦874年）の開闢岳噴火に伴う噴出物堆積層であり、非常に硬く固結しており、横半礼川遺跡基準層序の第5層に対応する。いわゆる「紫コラ」層である。

第10層は、粘質が強くやや硬く引き締まっており、細かな粒子（ $10\text{YR}2/2$ ）が認められる。

第11層は、7世紀最終四半期頃に比定される開闢岳の火山噴出物堆積層であり、横半礼川遺跡基準層序の第7層に比定出来る。

第12層は、第10層より黒みを帯び、粘質が強く水気を多く含む。 $2 \sim 10\text{mm}$ 大の礫を多く含む。

第13層は、層質的には第12層に類似しているが、若干、明るみが増す。 $10\text{YR}5/4$ 。

第14層は、「暗紫コラ」と呼ばれている開闢岳の噴出物堆積層である。（弥生時代中～後期）

第15層は、川床に良く認められる川砂利層であり、砂利の大きさでa、b層に分層が可能。15層aは $3 \sim 5\text{mm}$ 大の砂利を、15層bは 1mm 大の砂利が堆積している。

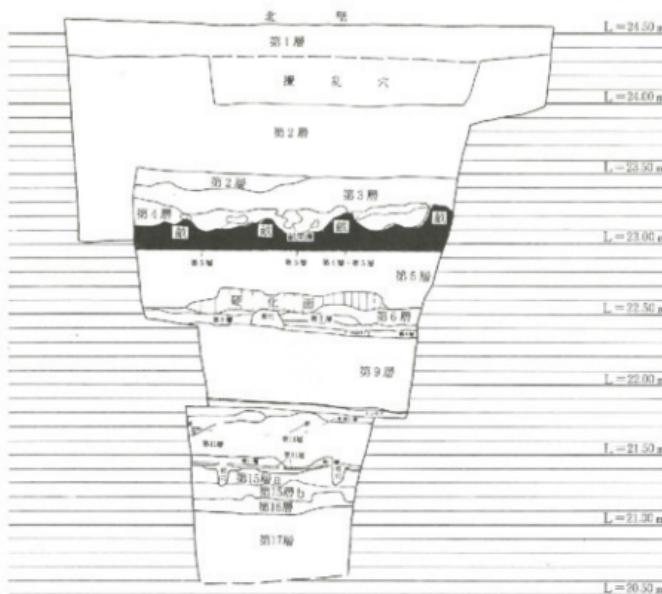
第16層は、非常に粘質が強く、水気も多い。 $10\text{YR}6/4$ or $6/6$ 。

第17層は、上層に比べ粘質、包水量も増している。 3cm 大の軽石が多く認められる。

(2) 遺構

a. 第5層（黒色帯）上面検出の壙跡（第4図）

第5層（黒色帯）上面で、壙の跡と推定される遺構を北壁と西壁南側で確認出来た。（第4図）



第4図 2トレンチ北壁土層断面図 ($S = 1/40$)

畠間溝下面には黄褐色の粘質土層が堆積している。南壁で畠状遺構が確認出来なかつたため、畠は、北東から南西方向に伸びるものと考えられる。なお、畠は平面的には捉えることは出来ず、土層断面にてはじめて検出が可能となつた。

b. 古道について。(第5図)

古道は第5層下部で検出された。古道は南北に伸びており、調査区中央部のあたりで、西側に伸びる道と交差している。硬化面の幅は概そ70cm前後であるが、北側よりでは120cmを測る。推測であるが、古道の北側よりでは、幅の広さから2股に分岐する可能があるのではないか。

古道上面では、中山式土壤硬度計を用い、土壤硬度試験を2ヶ所の試験区を設定し行った。南北に伸びる古道の南よりでは、X軸を1~13、Y軸をa~eまでの10四方の小グリットを設定した。(測定値A)。西側に伸びる古道では、T字の交差点を中心とし、X軸を1~10、Y軸をa~eまで設定した。(測定値B)

10四方の1グリット内で3ヶ所測計し、その平均値を求め、それを支持強度Pに換算し数値を出した。右記の通りである。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
a	17.25	14.74	16.68	18.45	14.56	12.52	11.92	10.11	9.11	6.34	5.59	5.17	3.67
b	1.71	29.81	12.23	16.19	19.25	14.2	16.01	13.45	6.98	6.05	7.04	5.0	3.91
c	1.57	25.97	10.43	14.87	12.66	13.97	23.76	17.83	5.54	5.56	7.38	6.44	5.54
d	3.86	14.87	12.16	9.54	16.91	10.3	26.35	18.08	8.62	6.29	6.29	7.58	6.34
e	2.68	14.7	12.65	32.45	3.98	11.06	31.85	24.02	7.79	6.0	5.71	5.46	6.0

$$P = \frac{100X}{0.7952 (40-X)^2}$$

X = スケール縮長

測定値A 支持強度 P 値

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
a	6.1	6.98	5.71	7.09	5.18	7.08	6.34	7.38	7.73	5.71	6.89	6.34	5.46	5.35	6.0
b	6.44	6.98	10.44	6.98	6.33	6.0	7.04	8.82	6.63	8.28	5.75	10.11	5.57	6.31	3.3
c	8.47	8.13	9.03	6.69	5.58	8.28	7.79	9.03	9.71	7.38	9.53	9.0	4.20	11.2	12.72
d	12.66	16.23	12.72	17.64	14.93	19.27	13.6	7.53	9.6	9.94	13.97	13.82	18.76	20.64	16.91
e	14.61	12.66	15.1	17.82	10.43	11.2	9.22	8.22	16.72	10.3	18.95	29.44	32.79	27.28	29.75

測定値B 支持強度 P 値

古道は若干全体的に、東側へ傾斜している。(第5図) 本来の地形的な要因もあると考えられるが、西側に伸びる古道は、おそらく調査区西側に位置する山手の方に伸びていくものと推測され、その傾斜角度も高くなるものと予想される。

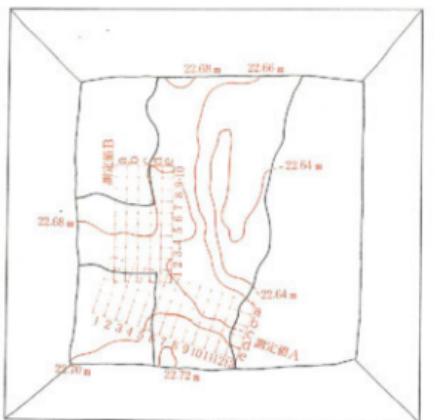
C. 9層上面検出の河川跡について

9層(紫コラ) 上面において、東西に蛇行する河川の痕跡を確認した。河川の幅は約70cm程であり、検出面から川床面まで概そ30cmぐらいである。一部、オーバー・ハンギの箇所も認められた。西暦874年の開闢岳の火山性堆積以降で、古道面下層の6層土が堆積するまでの期間に流水していたものと考えられるが、火山性噴出物降下直後の雨水に伴って、形成された河川かどうかは不明である。

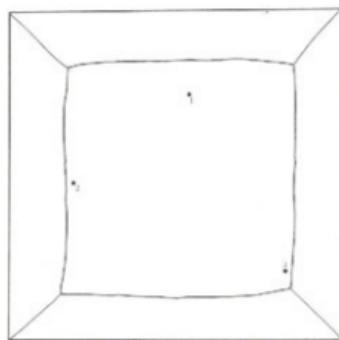
(文責 鎌田)



第9層(紫コラ)直上検出の河川跡検出状況

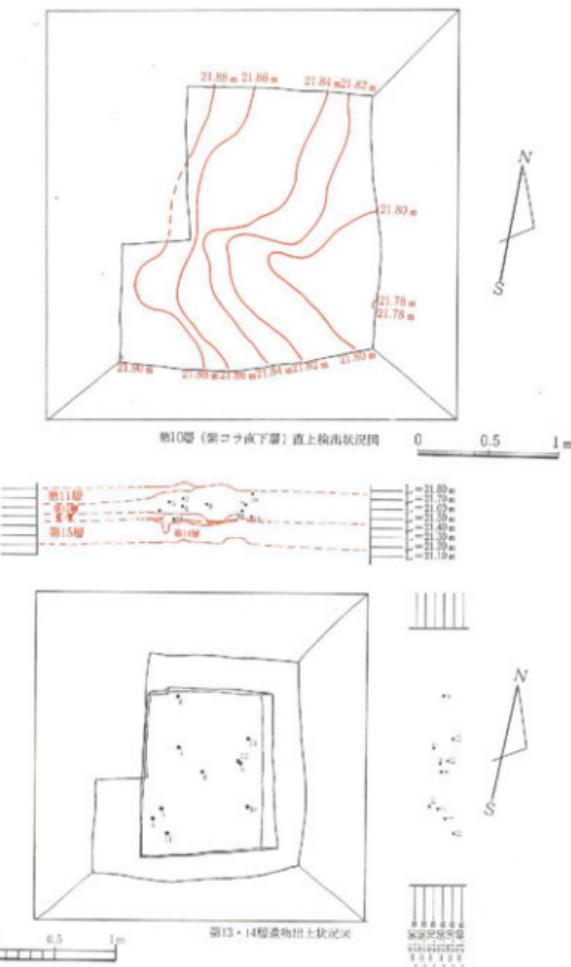


0 0.5 1m

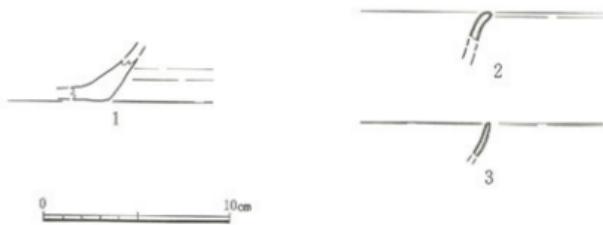


0 0.5 1m

第5図 2 トレンチ第5層検出遺構平面図・遺物出土状況図 (S = 1/40)



第6図 2 トレンチ第10層直上検出状況図・第13・14層遺物出土状況図 (S = 1/40)



第7図 2トレンチ出土遺物実測図 (S=1/3)

第1表 2トレンチ出土遺物観察表

図番	取上地	残存法數	器種	部位	色①	色②	色③	色④	胎土粒	混同材	萬	その他	層序	総合關係
1	4	破片	土師器碗	底部	10YR7/4 5Y5/1	10YR7/4 5Y5/1	10YR7/4 5Y5/1	10YR7/4 5Y5/1	細粒を含む	① ② ③ 回転ナデ ナデ	-	-	第13層 (青磁コフ上地)	
2	1	破片	青磁碗	口縁部	7.5GY7/1	7.5GY7/1	NB/0	-	滑らかな胎	① 滑胎 ② 粗和 ③ 施釉	内外面とも大きな貫入あり 還反曲	第5層 (黒色帶)		
3	2	破片	白磁碗	口縁部	25Y8/1	25Y8/1	25Y8/1	-	滑らかな胎	① 滑胎 ② 施釉 ③ 施釉	内外面とも微細な貫入やアーティグも状に入る白磁土と考えられる。	第5層 (黒色帶)		

(3) 出土遺物 (第5・6・7図)

2トレンチからは、総数29点の出土遺物があり、いずれも包含層からの出土である。そのうち3点の同化を行った。

(i) 5層出土遺物 (2・3)

5層からは、青磁碗口縁部(2)が出土した。口縁端部はやや外反し、連弁文等の文様は見られない。

5層からは、白磁皿または碗口縁部(3)が出土した。内外面とも微細な貫入が「あみだくじ」状に入り、やや釉は黄色味を帯びている。いわゆる白薩摩と呼ばれる薩摩焼系統の磁器と考えられ。近世以降の所産と考えられる。

(ii) 13層出土遺物(1)

13層からは、土師器杯底部が出土した。底面はヘラ切りのちナデが施されており中世に下らないものと思料する。外面は回転ヘラナデのちナデ調整を施している。

13層は橋牟礼川遺跡の第11層に比定される層であるが平安時代から中世に至る遺物が混在するものと思われ、この土師器碗は本来第4層に所属していたものと考えられる。
(文責 下山)

第3節 3トレンチの調査

2トレンチ調査区より北側に22m移動した地点で、2トレンチで確認された畝状遺構や古道の統一が検出できると予想されたトレンチである。地形的には2トレンチ同様、山裾に位置している。

(1) 層位(第8図)

第1層は耕作土であり、やわらかくサクサクしており、草木の根が多く入りこんでいる。

第2層は山から流失してきた土砂堆積層と考えられ、軽石やローリングを受けた土器が混入。

第3層は色調的には第5層に類似している。若干、軟質である。10YR3/2。

第4層は粘質土層でやや引き締まっている。2トレンチの畝間溝で確認されたものと同質土層と考えられるものである。

第5層は第6層より若干色調が薄く、やや引き締まっている。2~5mm大の礫を伴う。10YR3/1

第6層は、いわゆる中世の黒色帯層であり、橋牟礼川遺跡基準層序の第4層に対比が出来る。

第7層は粒子が細かく、粘質が強く小礫と軽石を伴い、8層上部にブロックで存在する。

第8層はやや粘質を伴い、粒子が細かく、2~5mm大の礫を多く含む。

第9層は、橋牟礼川遺跡基準層序第5層に対比が可能である、いわゆる「紫コラ」層である。

第10層は、粘質はさほどないが、粒子が細かくサクサクしている。1.5YR6/8。

第11層は、いわゆる「青コラ」と呼ばれており、橋牟礼川遺跡基準層序の第7層に対比できる。

3分層が可能である。a層は青コラの二次堆積層。b層は青コラのシルト層。c層はスコリア。

第12層は、粘質が強く、2~5mm大の小礫を多く含む。7.5YR6/6。

第13層は、遺物包含層である。粘質が強く、小礫を含み、下部にいくにつれ、若干、明るみが増すようである。

第14層は、「暗紫コラ」層であり非常に硬く引き締まっている。橋牟礼川遺跡基準層序の第11層に対比でき、硬化面の下には2トレンチの第15層に対比できる川砂利層が確認出来る。

(2) 遺構

a. 古道(第10図)

第6層(黒色帯)上部で南北に伸びる古道を検出した。古道の幅は概そ、60~70cm程である。層位的見解だと2トレンチで検出した古道の統きと推測出来るが、コンタ図でみると、2トレンチの古道は、北東方向に傾斜する古道と考えられる。

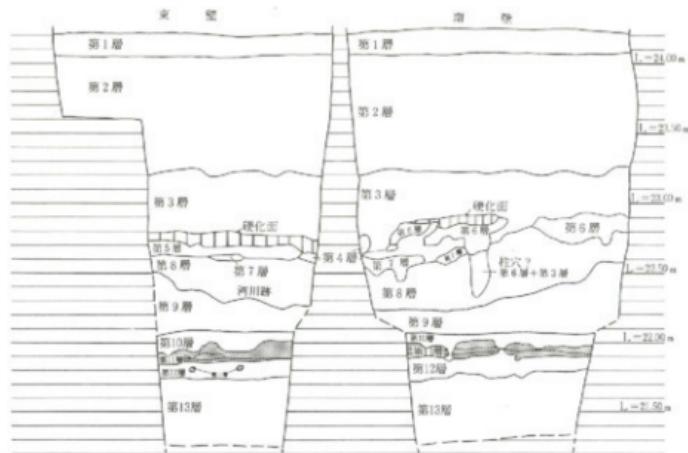
古道上面で土壤硬度試験を行った。古道の走行方向に平行に、X軸を1~10、Y軸をa~eまでの10cm四方の小グリッドを設定した。小グリッド内で3ヶ所測定し、その平均値を出した。それを支持強度Pに換算し、数値化を行った。右記の通りである。

b. 9層上面検出の河川跡について

9層(紫コラ)上面にて、2トレンチ同様、河川跡を検出した。東壁・北壁の土層断面図(第8図)より、北西から南東方向に蛇流していた河川跡と考えられ、河川の幅は、確認されている部分

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
a	21.47	18.37	11.59	20.67	13.47	18.63	15.05	20.41	17.82	14.87
b	17.89	19.5	16.91	13.42	12.23	19.5	13.79	16.74	6.54	12.65
c	13.34	12.83	9.19	16.07	21.17	11.02	19.6	34.34	29.81	9.36
d	7.34	8.5	23.93	21.4	27.42	35.32	16.91	23.76	16.68	36.67
e	14.2	23.7	15.66	13.96	21.4	16.91	11.41	20.41	7.92	27.42

支持強度 P 値



第8図 3トレンチ東壁・南壁土層断面図 ($S = 1/40$)

だけで、1mを測るが、本来はそれ以上と考えられる。河川の流水方向を鑑み、3トレンチの河川が2トレンチの確認された河川と同時期のものと推定すれば、2・3トレンチ東側で合流し、東南へ蛇行しながら流水していたと考えられる。

c. 10層上面について。(第10図)

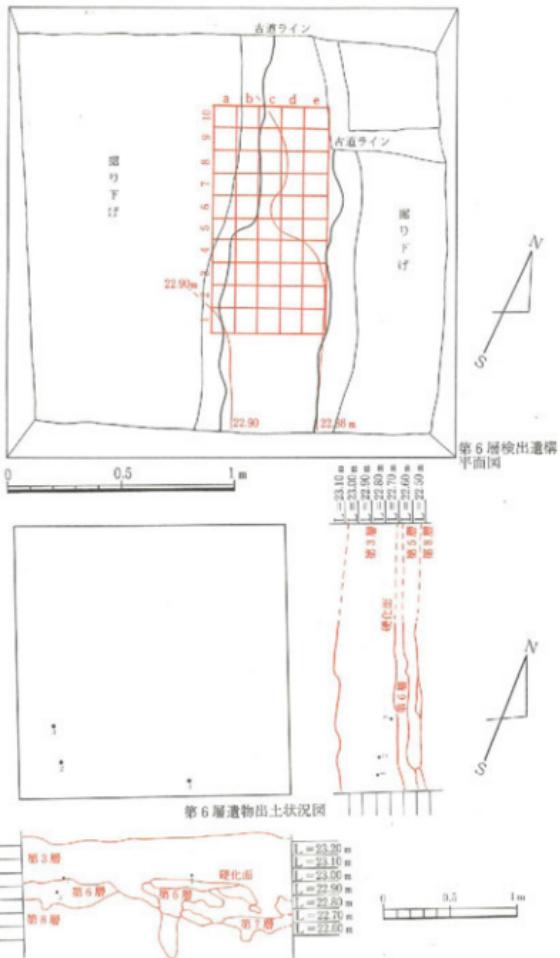
10層(「紫コラ」下層)上面、すなわち、「紫コラ」降下堆積直前の地形は、コンタ図から推定するに、北東方向へ傾斜していたものと考えられる。2トレンチでの「紫コラ」降下直前に比べ、10cm前後、3トレンチの方が高いようである。

d. 14層検出遺構について(第12図)

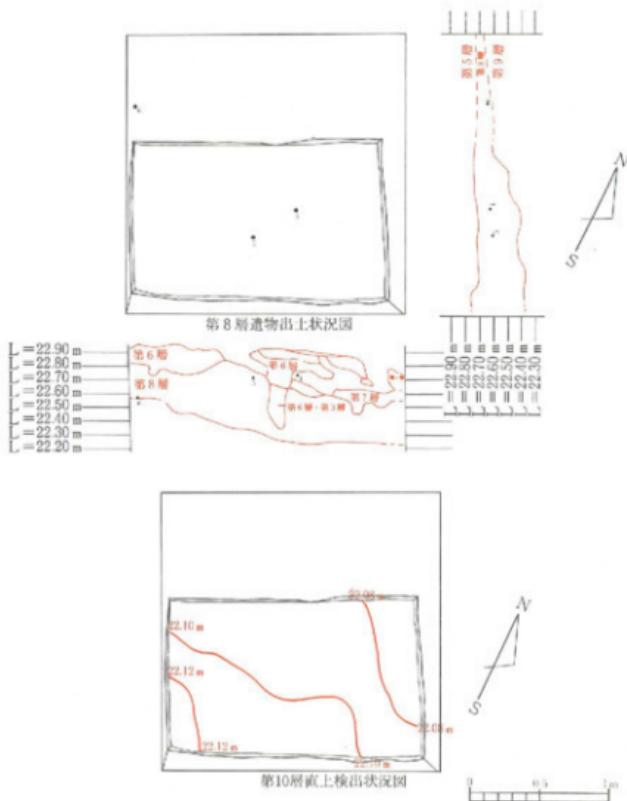
第14層(暗紫コラ)上面の、トレンチ南壁より、不定形な土壤を検出した。長軸方向は東西で、90cmを測り、短軸は検出した面だけ24cmを測る。第13層から掘り込まれているものであるが、土層断面の観察からは掘り込み面や、土壤の壁の立ち上がりは明確に確認出来なかつた。

検出面から土壤の下場まで、深さ5~20cmを測り、東側の方が西側より深く掘り込まれているようである。この土壤の時代的判断を第14層中からの出土遺物からによると、弥生時代後期から古墳時代とある程度時代的幅をもって把握できそうであるが、どの時期に付随するものかは断定が出来ない。

(文責 鎌田)



第9図 3 トレンチ第6層検出遺構平面図 ($S = 1/20$)・遺物出土状況図 ($S = 1/40$)

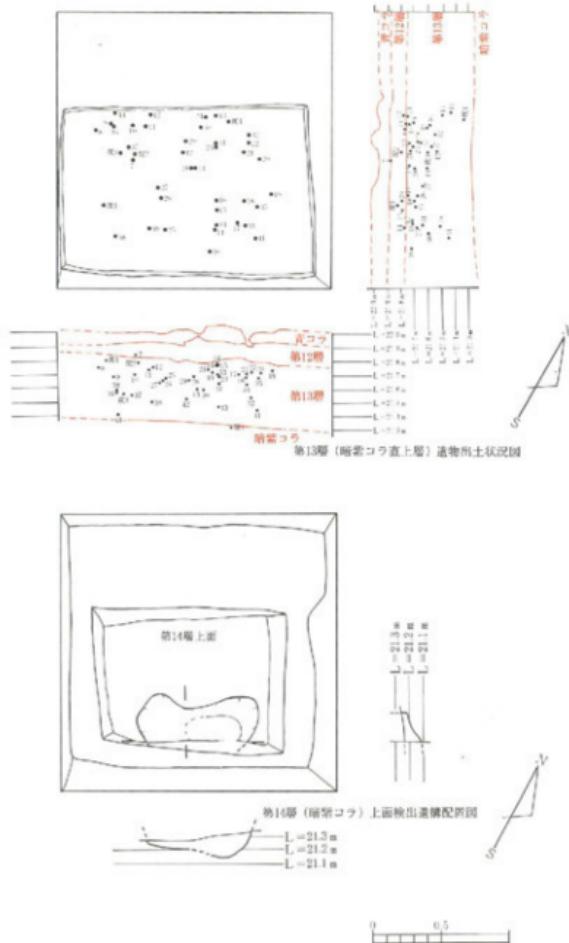


第10図 3 トレンチ第8層遺物出土状況図・第10層直上検出状況図 (S = 1/40)

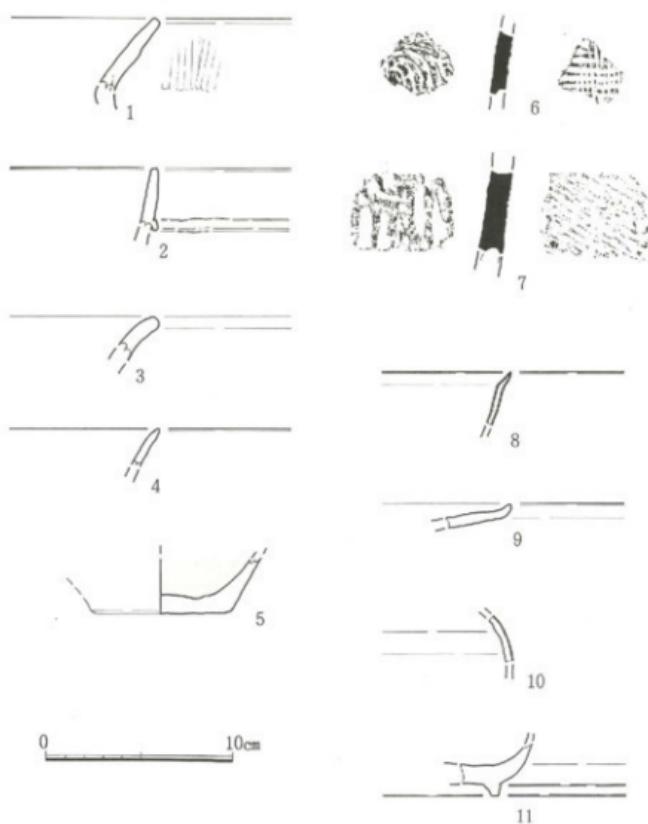
(3) 出土遺物 (第9~13図)

3トレンチでは、総数65点の遺物が出土した。いずれも包含層からの出土である。そのうち12点の図化を行った。

12は弥生時代の壺形土器底部と考えられる。弥生時代後期に該当するものの可能性が高い。1,



第11図 3 トレンチ第13層遺物出土状況図・第14層検出遺構配置図 (S = 1/40)



第12図 3 トレンチ出土遺物実測図① (S = 1 / 3)

2は壺形土器口縁部で、1は口縁部が「く」字状に屈曲し、外反する。2は口縁部が直立またはやや内湾するもので、口縁部下に突帯を有する。1の外面はハケメ（4～5本/cm）を施す。

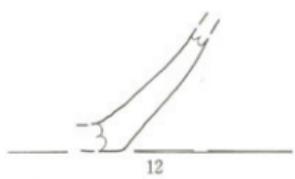
この2点はいずれもいわゆる「成川式土器」という様式に含まれるが、そのうち、1は「中津野式土器」、2は「笠貫式土器」と呼ばれる小様式に細分されるものに該当すると思われる。

1は、第13層、2は第2層から出土し、混在の可能性もあるが、付近に古墳時代の遺跡の存在が予想される。

3～5は土師器であり、奈良～平安時代に該当するものと考えられる。

3は壺形土器口縁部である。4は杯口縁部である。5は杯底部である。5の内面は赤色塗彩が施されており、いわゆる「内朱土器（うちあかどき）」と呼ばれているものである。

3は第2層、4は第4層からの出土であり、混在したものと考えられる。5は、真觀16年（西暦



第13図 3トレンチ出土遺物実測図② (S=1/2)

874年)の開闢岳噴出物堆積層直上層の出土である。

6, 7は須恵器である。いずれもにわかに器種を断じ得ない。6は外面に平行タタキが直交し、内面は「青海波」状の当具痕が残る。7は、外面に平行タタキが、内面に幅の広い平行する当具痕が見られる。6は4層、7は2層からの出土であり、近世の包含層中からの出土であり、混在したものと考えられる。

8, 10は磁器、9, 11は陶器である。8は染付碗口縁部で、蓋受けが見られることから元来蓋もあったものと考えられる。10は壺または瓶で、内面は無釉である。外面はいわゆる「べっ甲釉」がかかる。9は黒釉皿である。11は褐色釉碗である。9~11はいわゆる薩摩焼と総称される陶磁器であると考えられる。

(文責 下山)

第2表 3トレンチ出土遺物観察表

番号	基上高	残存法量	器種	部位	色 ①	色 ②	色 ③	色 ④	施土種	混付	美 良	その 他	層 序	参考関係
1	41	破片	變形土器	口縁部	10YR2/2 7SYR7/6	25YR5/4 5YR3/2	10R2/1 7SYR7/6	-	細砂粒を含む	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ヨコナダ	焼き若干ギモン	第13層 (開闢コラ上層)		
2	一般 ③	破片	成川式 變形土器	口縁部	5YR6/2 7SYR5/8	7SYR5/8 7SYR6/2	23YR6/4	-	細砂粒を多く含む	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ヨコナダ	焼き若干ギモン	第2層 (複乱層)		
3	一般 ①	破片	變形土器	口縁部	25YR7/6 5YR6/3	5YR6/3	7SYR4/1	-	細砂粒を含む 砂粒を含む	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ マツメ	焼き若干ギモン	第2層 (複乱層)		
4	3	破片	土器唇部 土器	口縁部	7SYR7/6	7SYR7/6	7SYR7/6	-	粗砂粒を若干含む	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ヨコナダ(日板ナダ) ⑭ ヨコナダ(絞版ナダ)	焼きギモン	第5層 (黒色帶上)		
5	6	① 1/1 7.5cm	土器唇部 土器	底 部	7.5YR7/6 2SYT7/4	25YR5/6 7SYR7/4	7SYR7/3 2.5SYT7/6	-	細砂粒を若干含む 砂粒を若干含む	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ナダ,赤色彫彩?	内面赤色彫?	第8層 (開闢コラ上)		
6	1	破片	須恵器或 變形土器	腹 部	10YR5/2	10YR4/1	2SYR5/4	-	細砂粒を若干含む	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ 円心凹凸痕 格子目タタキ	焼き上下不明 器内赤色	第4層 (黒色帶上層)		
7	一般 2層 ①	破片	須恵器或 變形土器	腹 部	10R4/2	10YR5/2	7SYR5/2	-	細砂粒を含む 砂粒を含む	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ 太めの当具痕 平行タタキ	焼きギモン 縁口縁あり	第2層 一般		
8	一般 2層 ④	破片	食付量付 碗	口縁部	7.5GY8/1	7.5GY8/1	7SY8/1	-	粗粒は粗 且つ砂質の底 あり	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ 粗粒	焼き若干ギモン	第2層 一般		
9	一般 2層 ⑤	破片	陶 器	口縁部	5Y2/1 7SY5/2 7SYR6/3	5Y2/1 7SY6/2	7SYR6/3	-	細砂粒を若干含む	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ 黒色彫 ⑭ 赤色彫 ⑮ 黑色彫	焼き若干ギモン	第2層 一般		
10	5	破片	磁器或 變形土器	肩 部	10YR4/4	5Y7/2	5Y7/2	-	精良な施 脂	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ 回板ヘナダ	外側はべっ甲色の 跡がかかる 内面は無釉黄入 り	第8層 (開闢上 黒色帶下 層)		
11	一般 2層 ⑦	破片	陶器	底 部	25YR4/6 10YR5/6	10YR5/6	25YR5/3	25YR5/3	陶胎は陶 石を用いたもの	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ 褐色釉 ⑭ 黄色釉 ⑮ 褐色釉 ⑯ 黄色釉 ⑰ ヨコナダ	薩摩そば釉調と思 われる	第2層 一般		
12	30	破片	變形土器	底 部	10YR7/4 7SYR2/1	3Y3/1 2SYR6/4	5Y3/1 2SYR6/4	10YR7/4 7SYR2/1	細砂粒を含む	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ヨコナダ		13層		

第4節 4トレンチの調査

4トレンチは、2・3トレンチより標高的に2.5m低い耕作地に2×2mで設定された調査区である。よって、2・3トレンチに比べ、比較的浅めで遺物包含層（黒色帶～）の検出が可能と予想される調査区であった。

(1) 層位 (第14図)

第1層は耕作土層である。軟質層であり、近・現代の遺物を多く確認出来た。

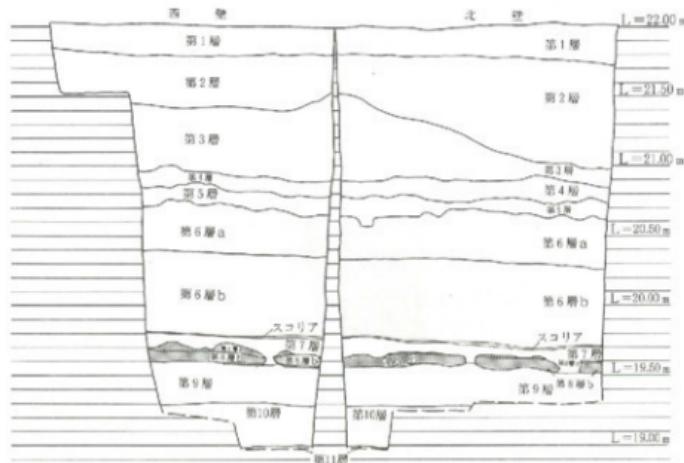
第2層は、山からの流出土砂堆積層であり、軽石や礫等を多く含む。第3層に比べると、やや引き締まっているようである。7.5YR5/4。

第3層は、第2層と同質層と推測出来るが、第2層より若干、軟質度が増す。7.5YR4/4。

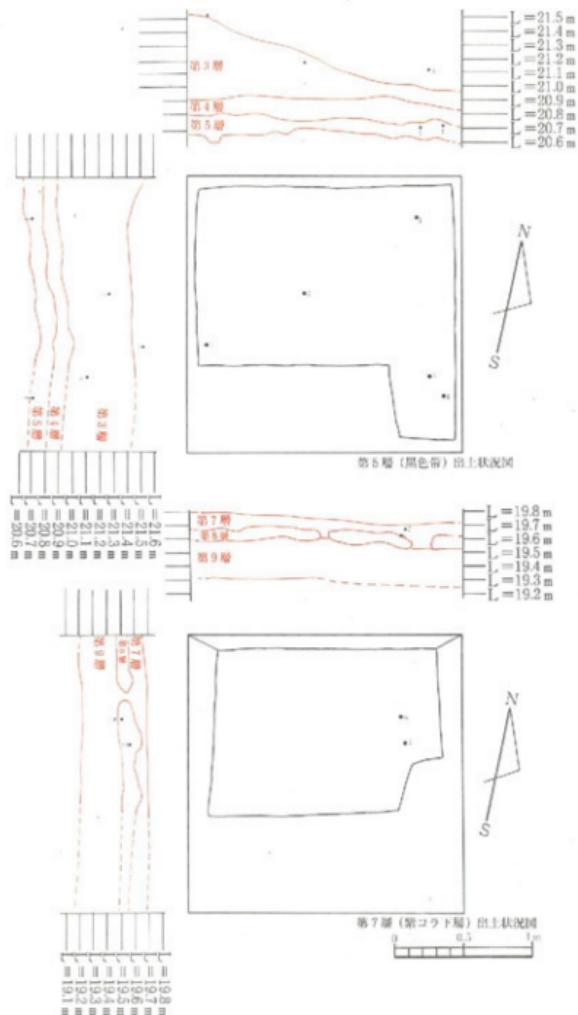
第4層は、層質的には第2・3層と同質層であるが、粘質を伴いやや引き締まっていることに特徴があると思われる。7.5YR2/1・17/1。

第5層は、いわゆる中世の黒色帶層である。橋本礼川遺跡基準層序の第4層に対比が出来る。

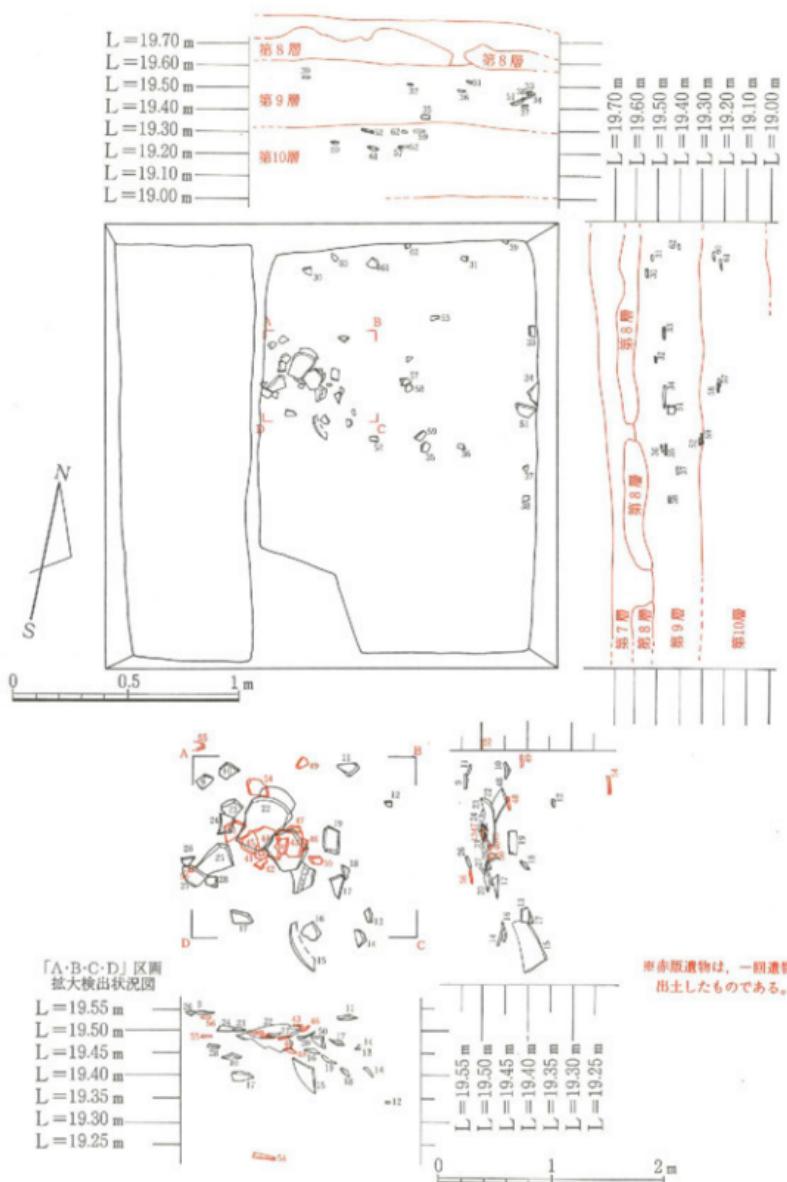
第6層は、「紫コラ」層である。橋本礼川遺跡基準層序の第5層である。a層は2次堆積層で、b層が1次堆積層と考える、b層下部にはスコリアが2cm程の厚さをもち堆積している。



第14図 4トレンチ北壁・西壁土層断面図 (S = 1/40)



第15図 4 トレンチ第5層遺物出土状況図・第7層遺物出土状況図 ($S = 1/40$)



第16図 4 トレンチ第9層遺物出土状況図・第10層遺物出土状況図 (S = 1/25・1/50)

第7層は、やや軟質層で、粘質がある。粒子は細かい。橋牟礼川遺跡基準層序の第6層に対比。

第8層は、いわゆる「青コラ」層である。橋牟礼川遺跡基準層序の第7層に対比が可能である。a層は2次堆積層で、粒子が非常に細かく硬く引き締まる。b層はa層に比べ粒子は荒く硬固している。

第9層は遺物包含層である。この層を主体として、「成川式土器」が出土している。粘質に富み2mmの大の顆を含んでいる。

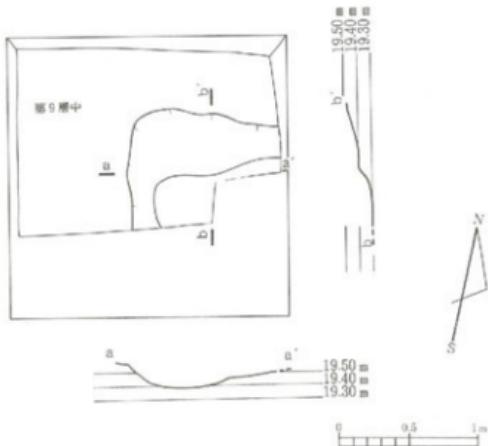
第10層は、第9層同様、遺物包含層である。第9層に比べ、やや黒みを帯び引き締まっている。

第11層は、通称「暗紫コラ」層と呼ばれており、橋牟礼川遺跡基準層位の第11層に対比が出来る。

(2) 遺構

a. 第9層a直上検出の河川跡について

4トレンチの第9層a（紫コラ2次堆積層）直上において、 2×2 mの調査区内を西南から北東方向に蛇行する河川跡を検出した。南追田遺跡内では、2・3トレンチについて、3例目である。2・3トレンチで検出した河川跡の流水方向とは異なっている。また、2・3トレンチの河川跡は、「紫コラ」の1次堆積層直上で検出されたのに対し、4トレンチの河川跡は「紫コラ」の2次堆積層直上で、時期的な差があると考えられる。よって、層位的な見解から鑑れば、2・3トレンチの河川が流水していた後、河川の流水方向が4トレンチの方向へ移動している可能性も伺えそうである。



第17図 4トレンチ第9層検出土壙平面位置図 ($S = 1/40$)

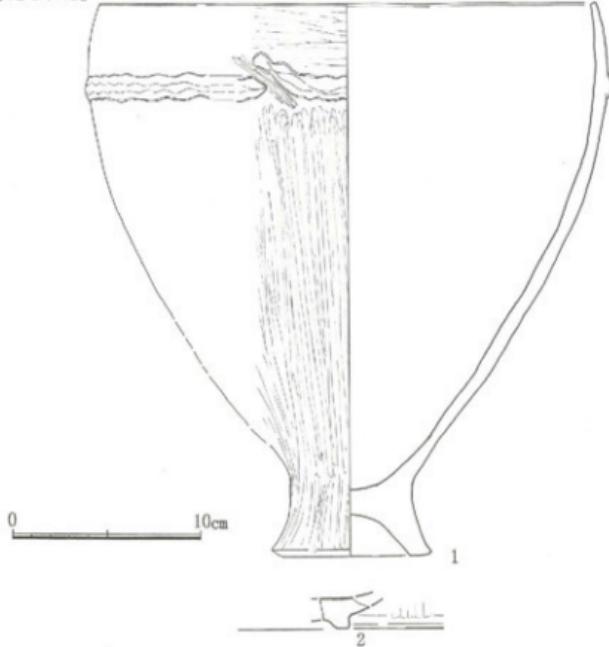
河川の幅は、確認されている部分のみで、約80cmを測るが、南側の河川が南壁奥に伸びていたため、本来はそれ以上の幅をもって流水していたものと推測出来よう。

b. 第9層検出の土壤について（第17図）

第9層（遺物包含層）中にて、調査区の南東よりの隅で、不定形な土壤を検出した。検出したレベルは、第8層（青コラ）を掘り抜いて、約10cm程掘り下げた状況である。第9層の層色に比べ、土壤内の埋土色がはっきりと黒味を帯びていたことから、土壤の形状や掘り方等もつかめることが可能となった。

不定形な土壤は、東側と南側はそれぞれ東壁と南壁の奥に伸びており、明確な形状や規模は不明であるが、検出した状態では、南北86cm、東西109cmを測る。掘り方は、すり鉢状に緩傾斜をもつて掘り込まれ、途中段掘りを行っている。

土壤内に充满している埋土は、粘質が非常に強く水気も多く含んでいる層であり、層色は非常に黒味を帯びている。埋土中に若干の炭を含んでいる。当初、この土壤が検出されたレベル高において、調査区西南隅を中心とし「成川式土器」の小様式である「笹貫式土器」がほぼ完形に復元出来る状態で、一括資料として出土している。（第16図）そのため土壤を住居跡内の「炉跡」として、覚えることも可能と考えられた。



第18図 4 トレンチ出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

第3表 4トレンチ出土遺物觀察表

番号	表上名	現存法量	器種	部位	色 ④	色 ⑤	色 ⑥	色 ⑦	胎 土 色	鉱物	調 整	その 他	順 序	接合部
1	8	◎ 1/4 有孔 1/5 ~1/6残 直 8.4cm ◎ (復元) 3.0cm ◎ 23.7cm	「成形式」 變形土器	23YH4/4 19H5/6	25YH5/6 SYH7/4	3YH4/1 SYH7/5	側面 2.5YR4/1 2.5YR5/4	細粒 含む	◎ ④重 ◎ ⑤重	◎ ③ナ ◎ ④カキ ◎ ⑤ガキ ◎ ⑥ヨコナ ◎ ⑦イガキ ◎ ⑧無調整	反転、突端を意識的にすらし、その周を工具でナヂる	第8~10項	7, 8, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 52	
2	一般	破片	青 晶 底 部	2.5GY8/1	7.5GY8/1	10Y8/1	側面 2.5GY8/1	精良な組 合	◎ ②輪 ◎ ③無鉛 ◎ ④ケズリ ◎ ⑤無鉛	◎ ④⑤は無鉛	第9 (以降から の土器類)			

この土壤内には、土壤の周辺で散布している「鉢貫式土器」の破片資料が、まったく入り込んでおらず、土壤と「鉢貫式土器」の一括資料との共時性を断定することが出来ない。しかし、土壤の掘り込み面は、間違いなく古墳時代の遺物包含層中からであり、「鉢貫式土器」の一括資料の時期に近接していると考えられ、この周辺に、古墳時代の集落が厚闊していたことが伺えよう。

(文青 雜誌)

(2) 出土遺物（第15・16・18図）

4トレンチからは総数91点の出土遺物があり、いずれも包含層からの出土である。そのうち、2点の図化を行った。

1は古墳時代の変形土器である。底部から口縁部まで残るが、口縁部は推定径に対し、 $1/5$ ～ $1/6$ が残存する。

1は、第9～10層で、第8層（7世紀後半期の闇聞岳噴出物堆積層：「青コラ」）の除去後に検出された。従って、7世紀後半期以前の遺物と考えられる。

口縁部はやや内湾し、口縁部下に一条の突帯を施す。突帯は粘土紐のはりつけの始点と終点とが意識的にずらされている。底部は脚台を有し、接地面は平坦である。脚台内面見込み部は、レンズ状に凹んでいる。

外面は、脚台から口縁部までいねいにミガキが施されており、突帯下はタテ、突帯上はヨコ方向にミガキが施されている。内面はナデ彫刻と考えられる。

このような特徴を有する壺形土器はいわゆる「成川式土器」の中で「徳貴式土器」として小様式が設定されているものに属すると考えられる。

ところで、平成4年度に実施された国指定史跡指宿鈴辛川遺物包含地内の確認調査では、7世紀後半に堆積した開闢岳の噴出物堆積層に掘り込まれた竪穴住居の床面で検出された壺形土器と同類と考えられ、本事例とともに、7世紀～8世紀代にかけて、かような形態の壺形土器が用いられていたものと考えられる。特に、壺形土器にミガキを多用する点は指宿地方では特徴的であり、そのような調整法を含めて細かな対比・検討が必要になるものと考えられる。

2は白磁碗底部であり、輸入磁器と考えられる。底部の高台内面見込部や疊付部、高台外面は無釉である。高台外面部から体部にかけては、5mm前後の先端が平坦な工具で磁胎にケズリを施している。(文責 下山)

(文責 下山)

第5節 5トレンチの調査

5トレンチは、現在耕作地である東隅に 2×2 mで設定し、調査を行った。調査区の西側の山が、えぐられているかのように土砂流出の痕跡が認められていた為、この調査区には、山からの土砂流出物堆積層が厚く堆積しているものと予想された。

(1) 層位 (第19図)

第1層は、耕作土であり、軟質でサクサクしている。近・現代の遺物が攪乱されていた。

第2層は、山からの土砂流出物堆積層と考えられ、約150cmの厚さをもって堆積している。比較的サクサクしており、2mm大の軽石や礫を多く含む。

第3層は、いわゆる黒色帯であり、橋半礼川遺跡基準層序の第4層に対比出来る。やや粘質を伴っている。5トレンチの遺構掘り込み面層である。遺物包含層もある。

第4層は、第2・3層に比べると粘質が弱く、サクサクしている。細かな粒子を多く含み、やや引き締まっている。7.5YR5/2・5/1。

第5層は、貞觀16年3月4日(西暦874年)の聞開岳噴火に伴う噴出物堆積層に比定されており、いわゆる「紫コラ」層である。極めて硬く固結しており、フォール・ユニットが明瞭に確認できる。5トレンチでは、第5層が120cmと非常に厚く堆積しており、分層も可能である。

第5層aは2次堆積層で、この層も細分層ができる。

第5層a①は、非常に硬く引き締まっている。ブロック状で2~4cm程の厚さをもって、ボロボロと崩れしていく。5YR5/2。

第5層a②は、シルト層であり、粒子は細かく、非常に硬く引き締まっている。

第5層bは、1次堆積層と考えられるもので、フォール・ユニットが明瞭に確認が出来、最下層にはスコリア層が4cm程、その上部にはテフラが2cm程の厚さをもって堆積している。橋半礼川遺跡基準層序の第5層に対比が出来る。

第6層は、いわゆる河川の川床で認められるような川砂利層である。粒子は比較的細かなほうであり、非常に硬く引き締まっている。10YR3/1・7.5YR3/1。

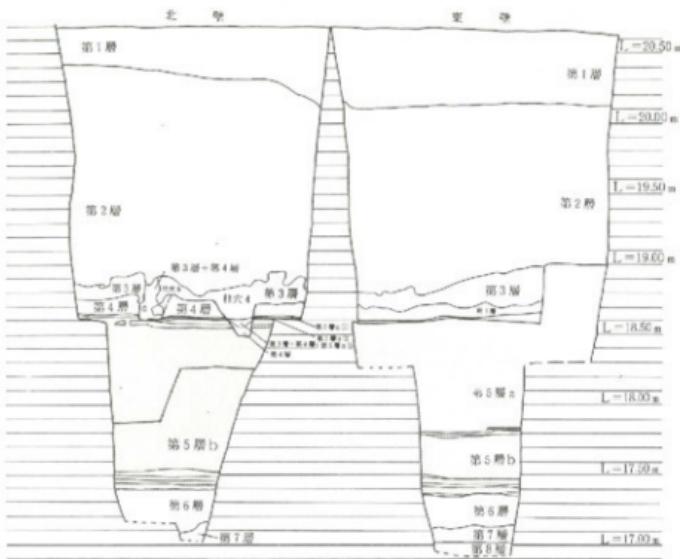
第7層は、川砂利層で、上層の第6層より硬く引き締まっている。その状況は第5層の「紫コラ」が硬く固結しているものに類似している。10YR3/2。

第8層は、第6層・第7層に比べ、色調が若干紫色を帯びるようである。粒子は、比較的細かく、第6層・第7層同様に川砂利層である。非常に硬く引き締まっている。

(2) 遺構 (第21図)

5トレンチからは、第3層(中世黒色帯)から掘り込まれている柱穴が5穴検出出来た。北壁においては柱穴2穴の横断面を観察することが可能である。(第19図を参照)

柱穴4は、第3層中から掘り込まれ、下場は、第5層aの上部を掘り抜いている。柱穴埋土は、柱穴の下部に第4層が、その上に第3層+第4層+第5層aが混在した層が入り込んでいる。柱穴埋土の上部は第3層が入り込んでおり、埋土の第3層と本来の第3層の境には、はっきりとした



第19図 5トレンチ北壁・東壁土層断面図 ($S = 1/40$)

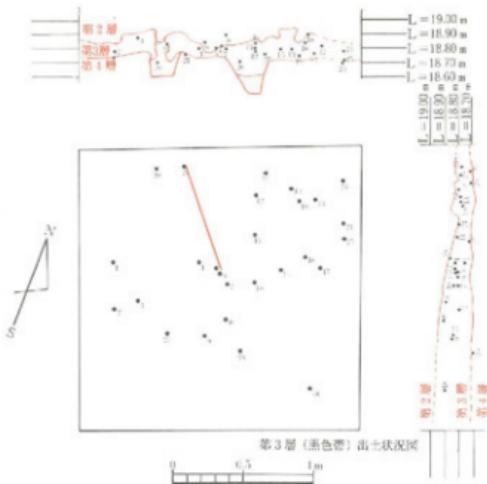
線を引くことが出来なかった。

柱穴5は、明確な立ち上がりの確認は出来なかつたが、柱穴埋土から第3層から掘り込まれたものであり、埋土の大半は第3層+第4層混在層で、埋土下部に第3層がブロックで点在している。

第4層上面で検出した柱穴5は、それらを掘り込んだ第3層（黒色帯）中の出土遺物から鑑みれば、平安時代から15世紀の間と考えられ、その時代になんらかの掘立柱建物がこの周辺に点在していたことが伺えるようである。5穴の柱穴の属性は下記のとおりである。（文責 錄田）

柱穴No	上場径 (cm)	下場径 (cm)	深さ (cm)	掘り込み面	埋土色
1	約 22 @ 20	約 6 @ 5	23	第3層	7.5YR3/4
2	約 24 @ 20.5	約 7 @ 6	33	第3層	5YR3/2
3	約 18 @ 17	約 3 @ 2	21	第3層	7.5YR3/4
4	約 25 @ 8 + α	約 15 @ 4 + α	21	第3層	5YR3/2
5	約 20 @ 6 + α	約 4.5 @ 3 + α	8・16	第3層	5YR3/2

柱穴の観察表



第20図 5トレンチ第3層遺物出土状況図 ($S = 1/40$)

(3) 出土遺物 (第20・22図)

5トレンチからは、総数81点の出土遺物があり、いずれも包含層からの出土である。そのうち、9点を図化した。

1～5は土器器杯である。1～3は口縁部、4、5は底部である。

1を3の土器器杯口縁部は概ね直立するが、2はやや外反気味になる。1の内面にはヘラミガキが施されている。3の口縁部には、焼成後に幅5mm程度の「溝」が掘られており、硬質の工具で擦ったものと考えられるが、その目的、機能については全く不明である。

4、5は土器器杯底部であるが、4は高台を持たず、5は高台を有する。4、5ともに底面はヘラ切りを施したものと考えられる。

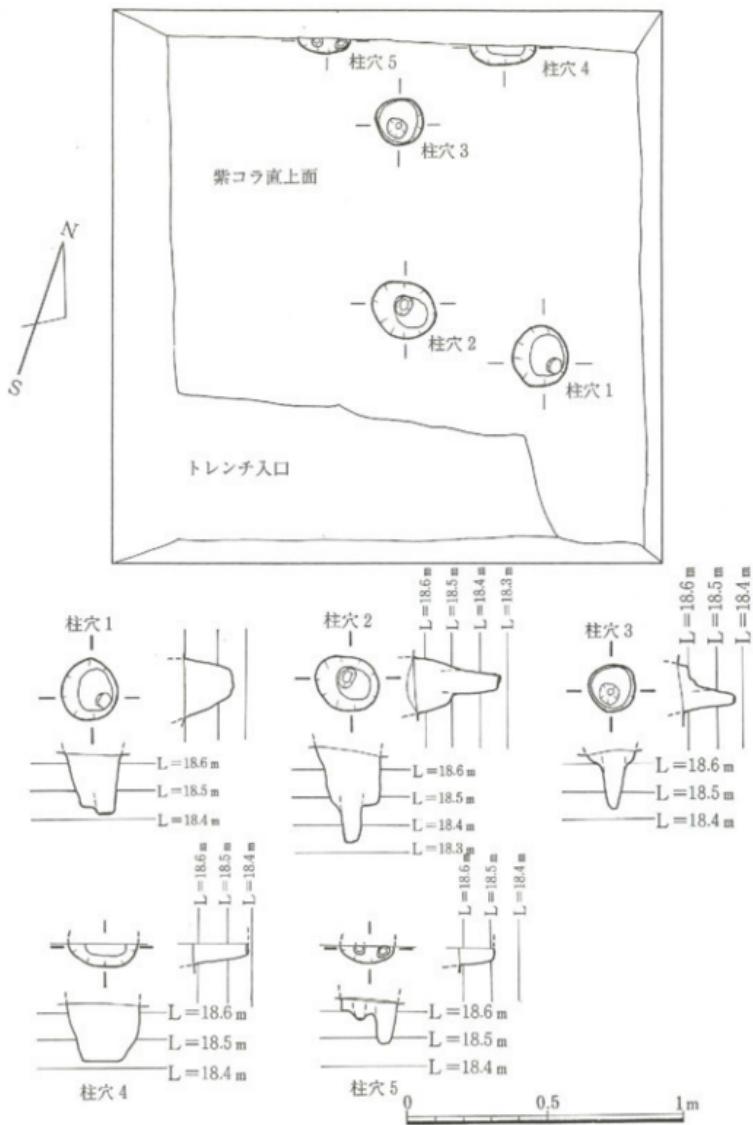
1は4層、2～5は3層出土であり、平安時代から中世にかけての包含層と思われる。

6は須恵器彫形土器の胴部で、外面は格子目タタキ、内面には太い「青海波」状の当具痕跡が残る。6は4層から出土した。

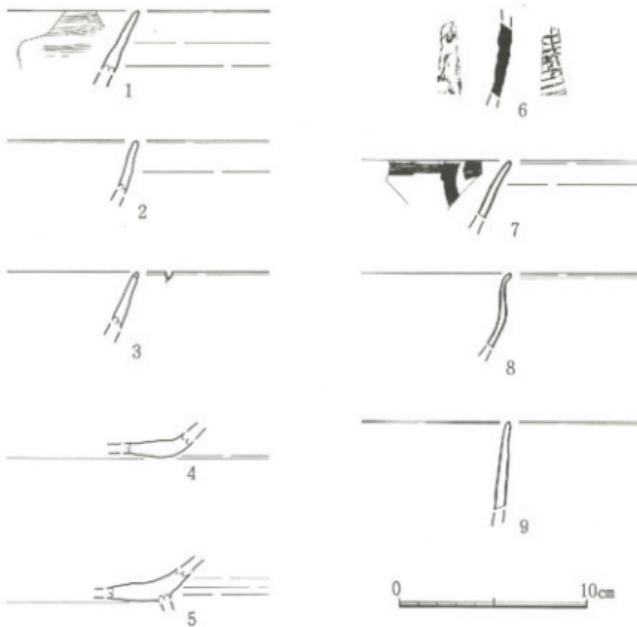
7は青磁碗口縁部で、輸入磁器と考えられる。内面には、櫛状具による5本を単位とする文様が見られる。7は3層出土であり、概ね中世の遺物包含層と考えられ、横牟礼川遺跡の第3層と対比される。

8は、そば軸の施された陶器碗口縁部である。9は湯飲み口縁部で、深緑色の釉が施される。また、8・9は、2層の搅乱遺物であることを明記しておく。

(文責 下山)



第21図 5 トレンチ第4層検出遺構配置図 (S = 1/20)



第22図 5トレンチ出土遺物実測図 (S = 1/3)

第4表 5トレンチ出土遺物観察表

回番	取上先	残存法量	器種	部位	色	色	色	色	胎土	焼附	調	整	その他の	層序	結合契約
1	27	破片	土器	環口縁部	7SY27/4	2SY27/4	7SY27/3	-	細砂粒を若干含む	④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	赤色、黒色ナガのちろいガキ	ナガモニ/内朱土附器	第4層		
2	13	破片	土器	環口縁部	2SY27/6 2YR27/2	2SY27/5 2YR27/5	2SY28/4	-	細砂粒を若干含む	④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	ややマメツ	ヤマメツ	焼きギモン	第3層	
3	15	破片	土器	環口縁部	2SY3/1 2SYR5/2	2SY3/1 2SYR5/2	2SYR7/4	-	細砂粒を若干含む	④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	ナデ	ナダ	焼きギモン	第3層	
4	中段 褐色 燃色 灰化 灰化	破片	土器	環口縁部	SYR7/6	2SYR7/6 10YR6/3	2SYR7/4 10YR6/4	-	細砂粒を若干含む	④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	ナデ	ナダ	ヘラ切り	第3層	
5	16	破片	土器	環底部	7SYR7/4	10YR8/3	10YR8/2	7SYR7/4	細砂粒を若干含む	④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	ナデやマメツ	ナシ	焼きギモン	第3層	
6	24	破片	土器	腹	2SY8/4	2SY7/4	2SY6/3	-	細砂粒を若干含む	-	青海波状	青海波状	焼き上りギモン	第4層	
7	6	破片	青磁	13縁部	SY6/3	SY6/3	SY7/2	-	細粒に微少な白粉を若干含む	④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	ナデ	ナダ	焼き若干ギモン	第3層	21
8	一般 2.3 解①	破片	磁器	口縁部	10YR6/1	7SY6/1	7SY6/1	-	粗粒は灰白色	④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	ナダ	ナダ	實入が入る	第2層 (土炒層)	
9	一般 2.3 解②	破片	茶碗?	口縁部	SY4/4 7SYR2/3	10YR3/3 7SY4/3	SY6/2	-	細砂粒を若干含む	④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	深緑色釉、施釉部 の赤茶色釉、施釉部 の深緑色釉、施釉部	實入がみられる 口径は10cm程度か?	第2層 (土炒層)		

第6節 6 トレンチの調査

6 トレンチは竹林と畠地の間の狭い空地に設けられた、東西に長軸を持つ $2 \times 1\text{ m}$ の調査区である。この調査区においては、5 トレンチ同様に、山からの土砂流出物堆積層や「紫コラ」層が厚く堆積していると予想されたところである。

(1) 層位（第23図）

第1層は表土層である。周辺が竹林の為、竹根が多く入り混じている。軟質層である。

第2層は、山からの土砂流出物堆積層であり、やや引き締まっている。7.5YR3/2。

第3層は、第2層より若干、明るみをもつ。2~5mmの大粒の礫を多く含む。やや粘質層である。

第4層は、いわゆる中世の黒色帯層であり、橋牟礼川遺跡基準層序の第4層に対比、2~5mmの大粒の礫を伴い、軟質層でやや粘質を伴う層である。7.5YR2/1。

第5層は、第4層よりやや引き締まっており、粘質層である。7.5YR4/3·4/4。

第6層は、層質的には第5層と同質層であるが、若干、色調的に明るみがある。7.5YR5/4。

第7層は、溝状遺構内の埋土層であり、層質的には第5層+第6層を混在したようである。

第8層は、いわゆる「紫コラ」層であり、橋牟礼川遺跡基準層序の第5層と対比が可能である。最下層には赤褐色のスコリアが堆積している。その上層には火山灰層が認められる。

第9層は、橋牟礼川遺跡基準層序の第6層に対比が可能。粘質土層でやや引き締まっている。

第10層は、いわゆる「青コラ」層であり、非常に硬く固結している。

第11層は、粒子が細かい砂利を多く含む粘質土層である。10YR2/3。

(2) 遺構（第23図）

a. 第8層上面検出の遺構について

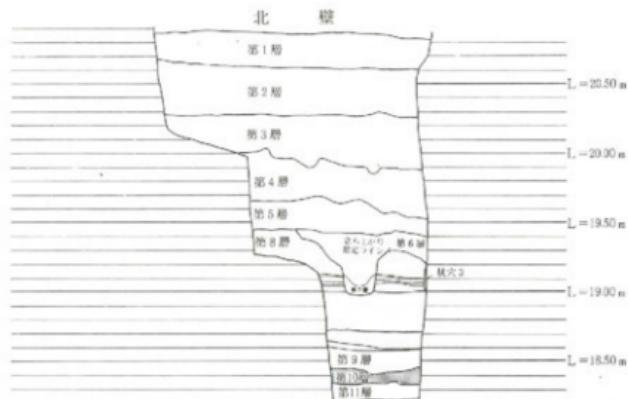
6 トレンチの第8層（紫コラ層）上面において、南北に伸びる溝状遺構と、杭穴を3穴検出した。

溝状遺構は、第6層中から掘り込まれている。（北壁土層断面図を参照）掘り方は、断面形態が若干、逆台形状を呈するがほぼ垂直に掘られており、検出面から溝状遺構の下場まで約30cm前後を測る。溝状遺構の埋土の下部には第6層+第7層+第8層の混在層が入り込んでおり、埋土の分層はやや不明瞭であった。

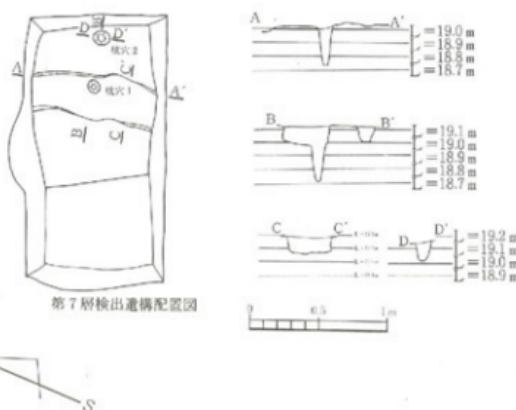
杭穴は平面検出が2穴、土層断面検出の1穴の計3穴である。まず、杭穴1は溝状遺構内で検出され、その深さは溝状遺構下場から26cmと比較的の深めである。柱穴2は、溝状遺構の東側約28cmに位置し、柱穴1と比べるとその深さは浅目で約11cmを測る。柱穴3は北壁と東壁の角で確認されたもので、北壁土層断面図においても若干認められる。杭穴の径は不明であるが、深さは約20cm程度で溝状遺構の下場とほぼ同じレベルである。

溝状遺構と杭穴3穴の共時性の判断は出来ないが、掘り込み面や埋土が第6層であることから時期的に近いと考えられる。時代的には西暦874年の「紫コラ」降灰以後で、第4層（中世黒色帯〔鎌倉～室町時代〕）の堆積以前である。よって、平安時代から中世以前に6 トレンチ周辺に存在した集落内、あるいは集落外に巡らせた溝及び杭と推測出来る。なお遺構に伴う出土遺物は皆無であった。

（文責 鎌田）



北壁土層断面図



第23図 6 トレンチ北壁土層断面図・第7層検出遺構配置図 ($S = 1/40$)

第7節 7トレンチの調査

7トレンチは、6トレンチの北側9.5mに位置し、 2×2 mの調査区である。6トレンチで検出された溝状遺構の連続性が把握できると予想されたところである。

(1) 層位（第24図）

第1層は耕作土層である。粒子のやや荒く、若干の粘質を伴う軟質層である。7.5YR3/3。

第2層は、軟質土層で、第1層に比べると若干粘質がない。第1層より明るみが増す。

第3層は、層質的には第1層に類似しており、やや硬く引き締まっている。7.5YR3/4。

第4層は、粒子がやや荒く、粘質は第3層と比べるとやや弱めである。色調は第2層より若干、黒味を帯びている。第1層から掘り込まれている擾乱穴からは、この第4層上部まで達しており、擾乱穴からは、近・現代の遺物が含まれている。7.5YR4/3・4/2。

第5層は、軟質層であり、粘質を若干伴っている。第4層と同様に粒子は比較的荒く、第4層より水気を多く含んでいる層である。

第6層は、いわゆる中世の黒色帯に対比が可能と考えられる層である。軟質土層で層質的には、第5層に類似しており粒子も荒い。10YR2/2。

第7層は、貞觀16年3月4日（西暦874年）に開闢岳を起源とする噴出物堆積層であり、非常に硬く固結している。最下部には、赤褐色のスコリアが堆積している。また、第7層上部には2次堆積層が約2cm程の厚さをもち堆積している。

第8層は、遺物包含層である。粒子はやや荒く、粘質度も強い。上部層は軟質土層であるが下部層にいくに従い、引き締まっていく。水気を多く含み、色調的には第3層に類似している。

第9層は、通常「青コラ」層と呼ばれているものであり、第8層中にブロックで点在している。硬く固結しており、第8層の中部から下部にかけて確認出来る。

第10層は、粒子がやや荒く、水気を多く伴っている粘質土層である。やや引き締まっており、色調的には第8層より茶味を帯びるようである。10YR3/3。

第11層は、粘質土層であり、硬く引き締まっている。粒子はやや荒く、小礫を多く含んでいる。北壁の最下部層では、土層自体の温度が高く、その下部に温泉の泉源があると推測出来る。

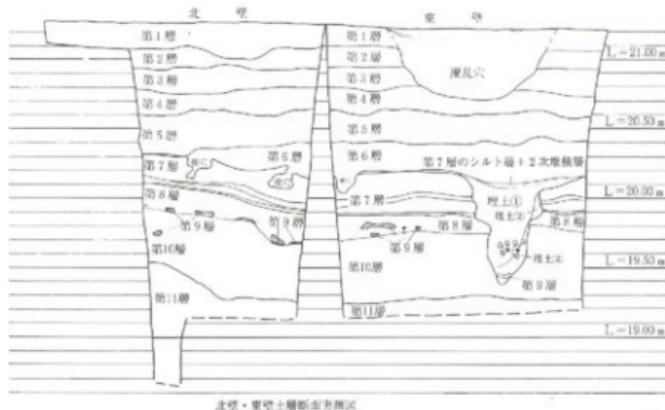
(2) 遺構（第24図）

7トレンチにおいては、平面的に遺構を検出することは出来なかったが、東壁の断面観察するなかで、ピット状遺構を検出することが出来た。このピット状遺構は、第6層（中世黒色帯）中から掘り込まれたものであり、その下場は第10層下部にまでいたっている。

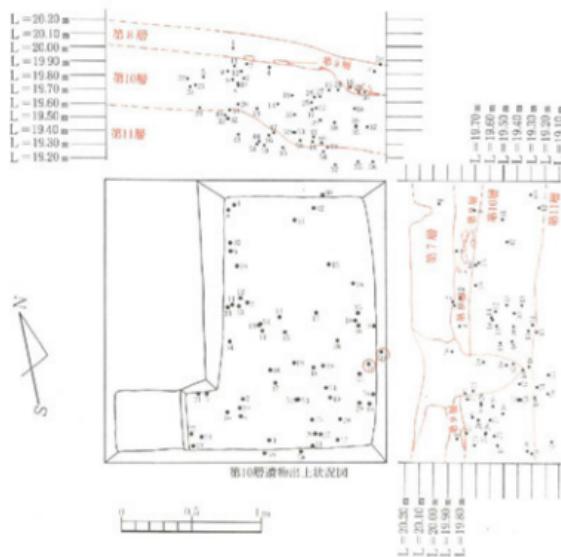
ピット状遺構の下場は、埋土最上面から深さ約82cmを測り一部段堀りが認められ、明確な柱痕跡を確認することは出来なかった。時代的には平安時代が考えられる。柱穴の埋土について説明する。

埋土①：第6層+第7層+第8層+第10層が混在している層である。色調的には第6層よりやや薄めであり（10YR3/2）、第8層より軟質層である。第9層がブロックで点在している。

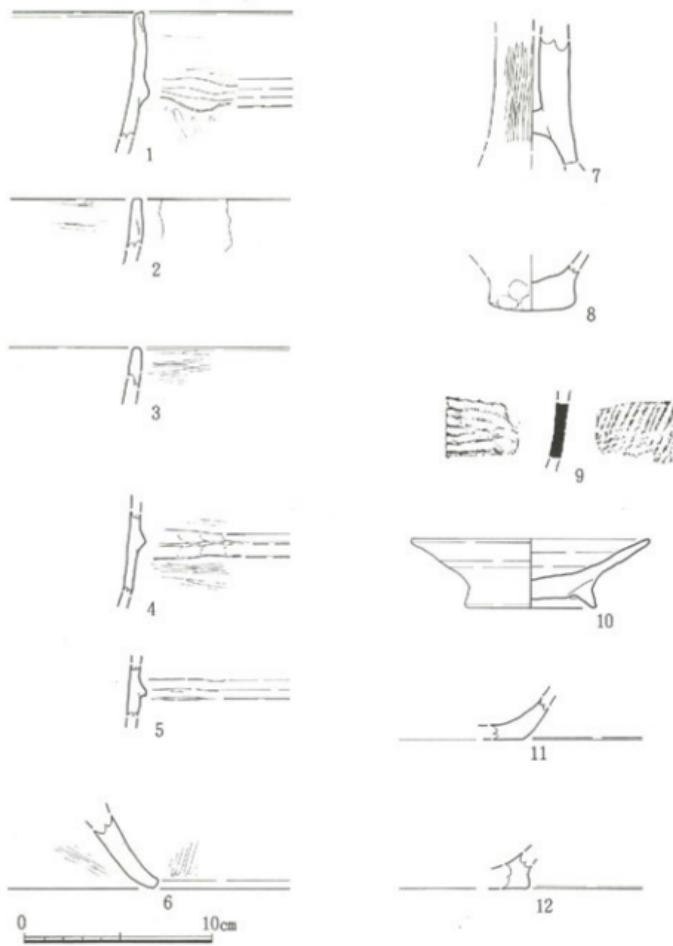
埋土②：第8層+第10層の混在層である。東壁観察によれば、南側からピット状遺構に流れこんでいる状況を確認出来る。第9層がブロックで点在している。



北壁・東壁土層断面図



第24図 7 トレンチ北壁・東壁土層断面図・第10層遺物出土状況図 (S = 1/40)



第25図 7 トレンチ出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

ピット状遺構の掘り込み面は第6層中であり、埋土最上面に約2~4cm程で堆積している「紫コラ」のスコリア層と「紫コラ」の2次堆積層が、ピット状遺構造作中に掘り出されつまれたものが、遺構の使用・廃棄後に、その上記の層が再び遺構内に埋土として入り込み、遺構上面は凹面を呈していると考えられる。このことから、ピット状遺構の掘り出された土は周辺に盛土とした可能性が伺える。

なお、遺構内出土の遺物は、取り上げNo.37と50が考えられる。(赤○で示してある)(文責 錄田)

第5表 7トレント出土遺物観察表

図番	収土先	残存法量	器種	部位	色①	色②	色③	色④	胎土粒	蓋柄付	調整	その他	層序	接合関係
1	54	破片	壺形土器	口縁部	10R6/8 7SYR7/3	7SYR7/3	10R6/8 7SYR7/3	-	細砂粒を含む	⑨ ⑩ 直	⑪ナデ ⑫ナデのちミガキ、ミガキ ⑬ヨコナデ ⑭ヨコナデ	焼き若干ギモン	第10層	
2	53	破片	壺形土器	口縁部	10R6/4 2SYR2/1	10R6/8	10R6/8	-	細砂粒を含む	⑨ ⑩ 直	⑪ナデ ⑫ナデのちミガキ ⑬ヨコナデ	焼きギモン	第10層	
3	9	破片	壺形土器 或鉢形器	口縁部	10R6/8 3SYR7/6	10R6/6 3SYR7/6	10R6/6 3SYR7/6	-	細砂粒を含む	⑨ ⑩ 直	⑪ナデ ⑫ナデのちミガキ ⑬ヨコナデ	焼きギモン	第8層	
4	10	破片	壺形土器	胴部突 き部	10R6/4 3SYR6/4	7SYR6/4 7SYR6/4	10R6/4 7SYR6/4	-	細砂粒を含む	⑨ ⑩ 直	⑪ナデ ⑫ナデのちミガキ ⑬ヨコナデ	焼きギモン	第8層	
5	34	破片	壺形土器	脚部突 き部	7SYR7/3 2SYR6/5	2SYR6/5 2SYR6/8	-	細砂粒を含む	⑨ ⑩ 直	⑪ナデ ⑫ナデのちミガキ ⑬ヨコナデ	焼きギモン	第10層		
6	12	破片	壺形土器	脚台部	SYR6/4 脚台部	SYR6/4 SYR6/4	SYR6/4 SYR6/4	-	細砂粒を含む	⑨ ⑩ 直	⑪ナデのちミガキ ⑫ナデのちミガキ ⑬ナデのちミガキ	焼きギモン	第8層	
7	一般 ⑤	1/1残存 高环脚判 月見いじ 口加工品 半寸 寸半	-	SYR6/4	SYR7/3	SY6/1	断 SYA/1	細砂粒を若千干渉する 細砂粒を含む	⑨ ⑩ 直 曲	⑪シザリ ⑫シザリニ ⑬スエサ, ナデ ⑭ヨコナデ	a.方向から穿孔を 試みたと考えられる。 ワレロを経験	表探		
8	5	1/1 現存 4.7cm	壺形土器 或鉢形器	ツマミ部 底	7SYR6/1 SYR6/4	10R5/4 10R5/4	10R5/4 10R5/4	-	細砂粒を多く含む	⑨ ⑩ 直	⑪ユビナデ ⑫ユビオサニの らナデ ⑬ナデ	埴地面は不安定 ⑭カーボン付着	第8層	
9	一般 ⑥	破片	壺形器 或鉢形器	胴部	SY5/1	NS/0	NE/0	-	細砂粒を含む	-	⑪ための平行の 直線痕 ⑫平行タタキ	焼き上下ギモン	第1層	
10	3	1/1 現存 12.5cm	高台付土器	-	7SYR8/4 7SYR8/4	7SYR8/4 7SYR8/4	7SYR8/4 7SYR8/4	-	細砂粒を含む	⑨ ⑩ 直 曲	⑪直輪ナデ ⑫直輪 ⑬横輪タタキ ⑭田輪ナデ ⑮田輪ナデ ⑯板ナデ ⑰板ナデ	反転	第8層	
11	黑色 第一種	破片 12.5cm	土器	环底部	SYR7/4	7SYR7/4	7SYR7/4 7SYR8/4	-	細砂粒を含む	⑨ ⑩ 直	⑪ナデ ⑫ナデ ⑬無調整		第6層	
12	墨色 第二種	破片	鉢形土器	底部	7SY6/1	10YR8/3	10YR7/2 2SYT7/3	-	砂粒を含む	⑨ ⑩ 直	⑪マイブ ⑫ナデ ⑬ナデ		第6層	

(3) 出土遺物 (第24・25図)

7トレントからは、総数76点の出土遺物があり、そのうち3点は溝状遺構から出土し、73点は包含層からの出土である。そのうち、溝状遺構出土遺物のうち1点を、包含層出土遺物から11点を図化した。

1~6は、古墳時代の壺形土器で、1~3は口縁部、4、5は胴部突き部、6は底部脚台部である。1~3は、ほぼ直立する口縁部で、口唇部上面を平坦に仕上げている。4は突き部分に粘土紐の貼付の指痕がナデ消しが完全で若干残る。6は底部脚台部で、接地面に平坦面を形成しない。

7は古墳時代高環形土器脚台部で、それを2次的に加工している。加工は、脚台内に充填されていた粘土を除去しようとしたもので、脚台下部のワレロを研磨している。この加工の痕跡から、高環形土器の脚台部を転用してふいごの羽口に再利用しようとしたものと考えられる。

8は古墳時代の鉢形土器底部または蓋形土器ツマミ部と考えられる。接地状況が不安定であり、蓋形土器の可能性が高い。12は古墳時代鉢形土器底部と考えられ、平底になるものである。

9は須恵器壺または壺形土器胴部で、外面に平行タタキが、内面に平行の太い当具痕跡が見られる。

10は土器皿形土器で略完形品である。高台を有し、高台から口縁部に直線的に聞く。このような高台皿の出現は、太宰府SK678以降に見られることから9世紀終から10世紀初頭にかけての所産と考えられているが、貞觀16年(西暦874年)の開闢岳噴出物堆積層下から出土しており、有高台皿の出現期については、貞觀16年を下らないと考えられる。11は土器器底である。

(文責 下山)

第8節 8 トレンチの調査

8トレンチは南追田遺跡調査地の中において、24.5mと最も標高的に高い地点に設定されたものである。調査面積は $2 \times 2\text{ m}$ の 4 m^2 である。地形的に標高が高いことと、トレンチ西側に山間の崖がせまっていること等から、遺物包含層は山からの土砂流出の際に攪乱を受け出し、欠落しているものと予想された。また、土砂流出物堆積層が厚く遺物包含層まで今回の調査で達することが出来るか懸念される地点でもあった。なお、調査地点は梅林であった為、梅木々の間に8トレンチの設定を行った。

(1) 層位 (第26図)

第1層は、梅林での表土層であり、毎年、梅木の落葉があるためか腐食土の発達が著しい。軟質層でサクサクしており、4mm大の小礫を伴う。近・現代の遺物がローリングを受けた状態で出土している。5YR1.7/1。

第2層は、粘質をやや伴いながら、比較的硬く引き締まっている土石流堆積物層である。小礫や軽石等を含み、黒曜石製の剥片が出土している。7.5YR5/4。

第3層は、第2層よりやや茶味色が増し、粘質土が強くなるようである。第2層同様、硬く引き締まっており、小礫を多く含むが軽石の量は減る。7.5YR5/6・4/6。

第4層は、第2・3層に比べて粘質土が強くなる。粒子は細くなり、第2・3層より軟質層となる。小礫や軽石は認められない。5YR4/4。

第5層は、第9層の搅乱層と考えられる。粘質を伴い水気を含む。ローリングを受けた土器等が出土している。第9層より色調的ににぶいようである。7.5YR2/1。

第6層は、層質的には第5層に類似し、やや黒味が抜けようである。7.5YR3/1・2/2。

第7層は、層質的には第6層に類似している。第6層や第8層中にブロック状で点在している。軟質層であり、粒子が比較的荒い。5YR4/2・3/2。

第8層は、粘質をやや伴う粒子がやや荒い層である。小礫や軽石等を多く含む軟質層である。第6層と第7層同様、遺物が出土している。5YR3/2。

第9層は、本来の中世黒色帯と考えられ、遺物包含層である。粘質性はさほど無く、粒子はやや荒い。小礫を若干含み、やや引き締まっている。第5層と比べると色調的に黒味が強く、安定しているようである。5YR1.7/1。

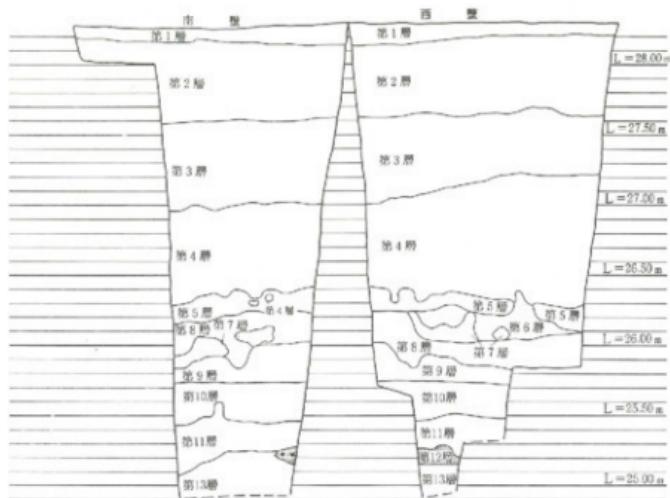
第10層は、いわゆる「紫コラ」層である。スコリアや火山灰層ではなく、全て2次堆積層と考えられる。5YR5/1・4/1。

第11層は、粒子が比較的細かく、粘質が強い。やや引き締まっている。7.5YR4/3。

第12層は、いわゆる「青コラ」層であり、第10層同様2次堆積層である。粒子は非常に細かく、引き締まっている。5YR5/1。

第13層は、粒子がやや荒く、粘質があり、やや引き締まっている層である。小礫等を含み、第9層より黒味が強い。7.5YR3/1。

(文責 錦田)



第26図 8 トレンチ南壁・西壁土層断面図 ($S = 1/40$)

(2) 出土遺物 (第27・28・29図)

8 トレンチからは、総数157点の出土遺物があり、いずれも包含層からの出土である。そのうち、22点の図化を行った。

1, 2は古墳時代壺形土器で、1は肩部屈曲部、2は胴部突帯部である。1は外面にハケメ (4本/1cm) が施される。1は「成川式土器」と総称される様式群のなかで「中津野式土器」に該当すると考えられる。2は胴部突帯部であるが、口縁部に向かって外反せず、直立もしくは内湾するものと思われる。1は9層、2は5層からの出土であり、混在したものと考えられる。

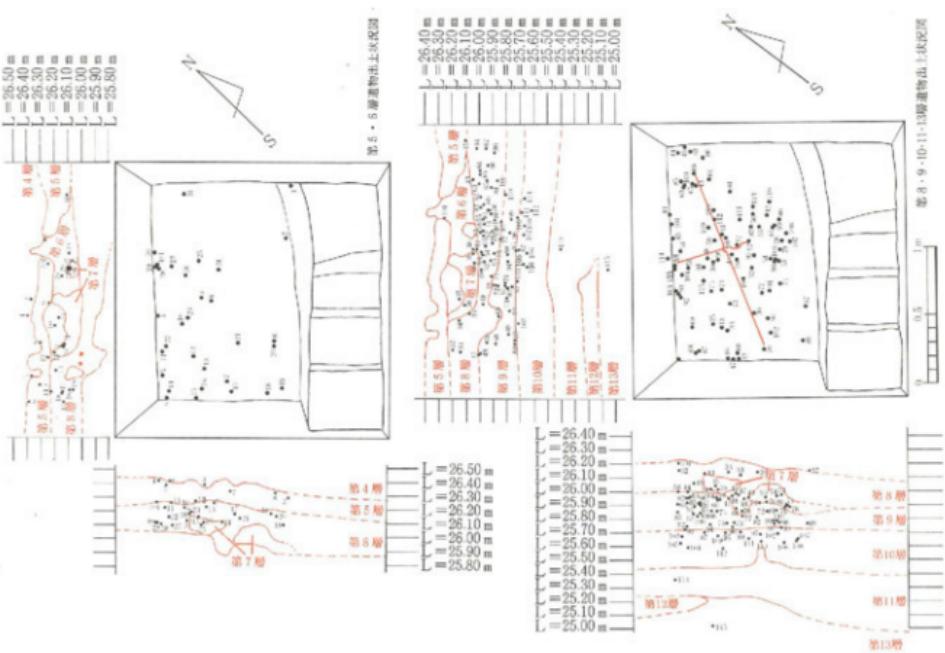
3, 4は須恵器壺または壺形土器胴部である。1は外面に平行タタキが、内面は当具痕をナデ消している。調整面から、3は壺形土器の可能性が高い。2は外面に平行タタキが、内面に「青海波」状の当具痕が見られる。

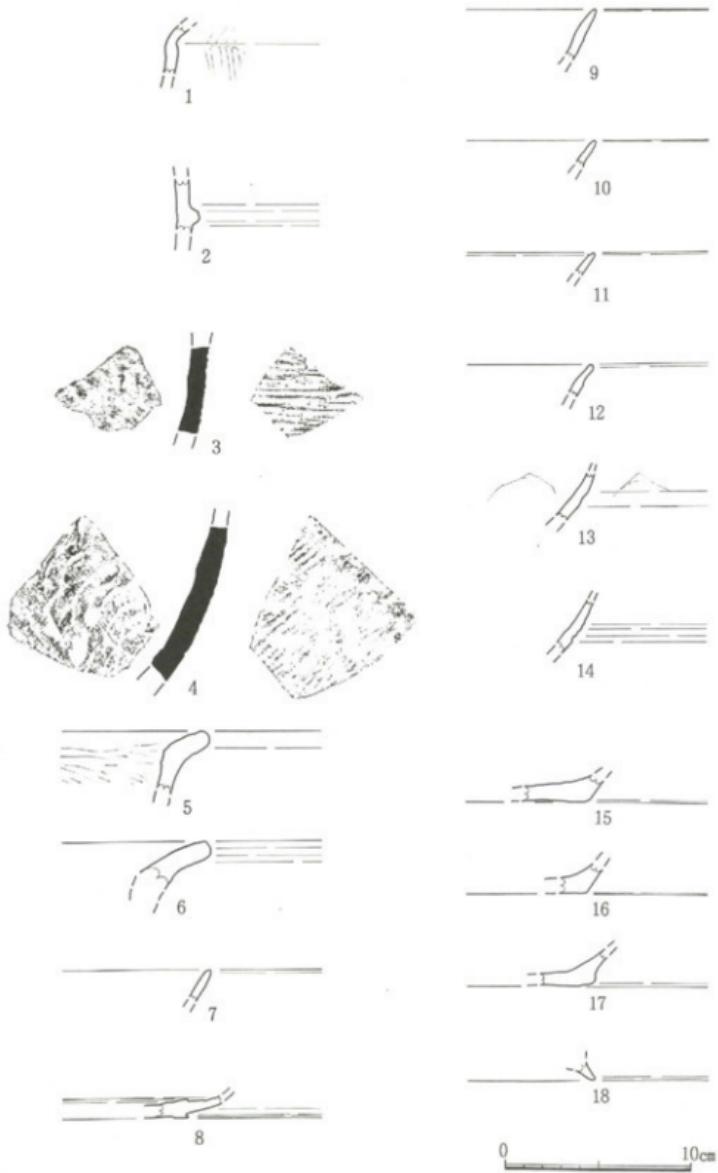
5, 6は土師器壺形土器口縁部である。両者とも口縁部が大きく外反するもので、5は内面にヘラケズリを施す。

7~18は土師器杯である。7, 9~12は口縁部である。

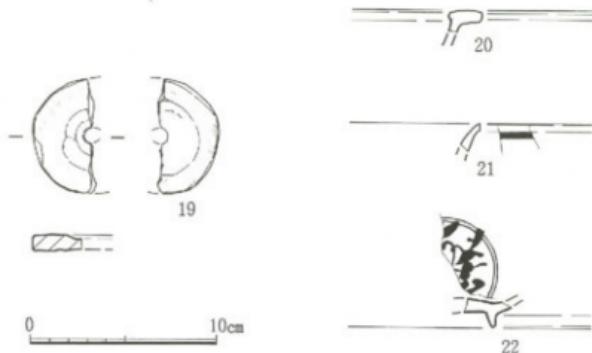
13, 14は胴部である。13は内外面ともミガキが施されている。14は須恵質の土師器である。

第27図 8 トレンチ第5・6層出土状況図・第8～13層出土状況図 (S = 1 / 40)





第28図 8 トレンチ出土遺物実測図① (S = 1 / 3)



第29図 8 トレンチ出土遺物実測図② (S = 1 / 3)

8, 15~17は高台を持たない杯の底部である。

8の接地面はヘラ切りの痕跡が明瞭に残るが、15~17はその痕跡は見られない。また、8は内面見込み部に回転ヘラケズリの痕跡が見られるが、15~17はナデ消されている。

18は高台を有する杯の高台部分である。

これら土師器杯は8, 13, 15, 16, 19が第5層から、7, 9が第8層から出土し、また10~12, 14, 17, 18が第9層から出土している。第9層が橋本礼川遺跡での第3層（平安時代～中世）に対応すると考えられるため、第5層、第8層の土師器杯は混在の可能性が大きい。

19は土製紡錘車の半欠品である。焼成後、内外面を研磨している。第5層からの出土であり、中世以降の包含層からの出土であるが、土製紡錘車の存続期間の検討が望まれると同時に、混在の可能性がある。

20~22は陶磁器類である。20, 21は陶器で、22は染付碗底部である。

20は壺または鉢、半胴等の口縁部と考えられるが器種は判然としない。暗褐色の薄い施釉が見られる。21は、いわゆる「そば釉」が施されており、釉厚は薄い。口縁部外面にはやや釉が厚くたまる（図中スミ入れ部分）。

22は、豊作部のみ無釉で、他は施釉される。内面見込み部には二重の輪内に草花文が絵付けされている。

20~22は第1層より出土し、近・現代の遺物と思われる。

(文責 下山)

第6表 8 トレンチ出土遺物観察表①

回番	東北	残存法量	器種	部位	色④	色⑤	色⑥	色⑦	胎土粒	表面	溝	整	その他の	層序	混合関係
1	89	破片	變形土器	腹 底	2SYR6/3	10YR6/2	10YR5/1	-	細粒粘土 含む	④⑤ 粗	⑥⑦ ナデ ハケメのち少 ア	焼きギモン	第9層		
2	22	破片	變形土器	腹 底	SYR7/4	2SYR4/1	2SYR5/1	2SYR5/4	細粒粘土 多く含む	④⑤ 粗	⑥⑦ ナデ マツフ マツフ	焼き上下ギモン	第5層		
3	101	破片	変形土器	器 底	SYT/1	SY6/1	SY7/1	-	微粒粘土 含む	④⑤ 粗	⑥⑦ ナデ 平行クタキ	焼き上下ギモン	第5層		

図番	取上№	残存法量	器種	部位	色 ④	色 ⑤	色 ⑥	色 ⑦	胎土粒	測定	調整	その他	層序	集合場
4	57	破片	圓底器 或 變形土器	脚	2SYR6/4 2SYR5/2	2SYR6/3	2SYR6/2	-	粗砂粒を 含む	⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮	⑯ 青海波状当美 島のちナデ 平行タキ妻 面赤變		第8層	58
5	66	破片	變形土器	L脚部	SYR4/3 SYR6/2	SYR5/2	SYR6/4	-	粗砂粒を 含む 若干含む 若干含む 若干含む	⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮	⑯ ケズリ、ヨコ ヨコナデ ヨコナデ	焼き若干ギモン	第8層	70
6	47	破片	變形土器	口縁部	SYR5/4	SYR5/5	SYR6/4	-	粗砂粒を 含む 若干含む 若干含む	⑩ ⑪ ⑫ ⑬	⑯ ヨコナデ ヨコナデ ヨコナデ	焼きギモン	第8層	
7	44	破片	土 脚 器	坏口縁 部	10YR6/3	SYR6/4	2SYR6/6	-	粗砂粒を 含む	-	⑩ ナデ ⑪ ナデ ⑫ ナデ	焼きギモン	第8層	
8	13	破片	土 脚 器	坏口部	7.5YR7/4	7.5YR7/4	7.5YR7/4	⑩ 7.5YR7/4	粗砂粒を 含む	⑩ ⑪ ⑫ ⑬	⑯ 回転ヘラケズ リ ⑯ ハラケズリ ⑯ ヘラ切りのち ナデ		第8層	
9	67	破片	土 脚 器	坏口縁 部	2.5YR6/4	2SYR6/4	SYR8/4	-	粗砂粒を 含む	⑩ ⑪ ⑫ ⑬	⑯ 回転ナデ 回転ナデ 回転ナデ	焼きギモン	第8層	
10	90	破片	土 脚 器	坏口縁 部	SYR7/6	7.5YR7/6	7.5YR7/6	-	粗砂粒を 若干含む	-	⑩ ナデ ⑪ 回転ナデ ⑫ 回転ナデ	焼きギモン	第9層	
11	99	破片	土 脚 器	坏口縁 部	SYR7/6	SYR7/6	SYR7/6	-	粗砂粒を 若干含む	-	⑩ ナデ ⑪ ナデ ⑫ ナデ	焼きギモン	第9層	
12	100	破片	土 脚 器	坏口縁 部	SYR6/6	SYR7/6	SYR7/4	-	粗砂粒を 含む	⑩ ⑪ ⑫ ⑬	⑯ ナデ 回転ナデ ナデ	焼きギモン	第9層	
13	18	破片	土 脚 器	坏脚部	2.5Y4/1 10YR6/3	7.5YR7/4	10YR7/3	-	粗砂粒を 含む	⑩ ⑪ ⑫ ⑬	⑯ ミガキ 回転ヘラケズ リのらミガキ	焼きギモン	第8層	
14	105	破片	土器器皿	脚 部	7.5YR7/6	10YR7/4	10YR7/4	-	粗砂粒を 若干含む	-	⑩ ナデ 回転ナデ	焼き若干ギモン	第9層	
15	24	破片	土 脚 器	坏底部	SYR7/4	10YR7/4	SYR7/6 10YR6/1	⑩ 10YR7/4 10YR8/2	粗砂粒を 含む 若干含む	⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮	⑯ ナデ ⑪ ナデ 無調整		第8層	
16	15	破片	土 脚 器	坏底部	10YR7/4	10YR6/3	10YR6/1 10YR6/3	⑩ 10YR7/4	粗砂粒を 含む	-	⑩ ナデ ⑪ ナデ ⑫ ナデ		第8層	
17	43	破片	土 脚 器	坏底部	10YR7/4	10YR7/4 7.5Y5/1	10YR7/4	⑩ 10YR7/4	粗砂粒を 若干含む	⑩ ⑪ ⑫ ⑬	⑯ ナデ ⑪ ナデ 無調整		第9層	
18	93	破片	土 脚 器	坏脚台 部	7.5YR8/6	7.5YR8/6	7.5YR8/6 10YR8/6	⑩ 10YR8/6	粗砂粒を 若干含む	-	⑩ ⑯ 回転ナデ 回転ナデ 回転ナデ	焼きギモン	第9層	
19	73	半穴1/2 残存 直径(復 元)6.2cm	土製藝術	-	10YR5/2	10YR5/2	10YR5/2 10YR5/2	-	粗砂粒を 含む	⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮	⑯ 研磨 回転 研磨	焼成後花、裏、側 面を研磨	第5層	
20	一般 1層 ①	破片	輪型器 或 變形土器	口縁部	SYR4/1 SYR5/1	2SYR5/3 2SYR4/1	2SYR4/1	-	粗砂粒を 若干含む	-	⑩ 滲粘 ⑪ 滲粘 ⑫ 旋轉	黒墨の跡または 半剥と思われる	第1層	
21	56	破片	輪器 或 變形土器	口縁部	SYR4/4	SYR4/4	SYR4/1	-	粗砂粒を 若干含む	-	⑩ 回転ナデ、そ ば附 ⑯ 回転ナデ、そ ば附 ⑯ 回転ナデ、そ ば附 ⑯ 回転ナデ、そ ば附	焼きギモン そば附がかかる質 に入り	第1層	
22	一般 ②	破片	乗 片 器	底 部	長 短 で 組 付				燒成な磁 器		⑩ 蓼花文 ⑯ 不明 乗付部は施釉ア クセス入あり	焼成アーチ 底付入あり	第1層	

第7表 8トレンチ出土遺物観察表②

第9節 9 トレンチの調査

旧耕作地内に 2×2 m の調査区を設定した。10トレンチ同様な山からの土砂流出物堆積層が厚く堆積していると予想された地点である。

(1) 層位 (第30図)

第1層は、耕作土層であり、軟質層でサクサクしており、粒子はやや荒い。10YR3/3。

第2層は、粘質を非常に伴い、水気もやや多く含んでいる。粒子はやや荒く、軟質層であるが部分的に硬く引き締まるところがある。軽石や小礫を含む。75YR4/6。

第3層は、粘質が伴うものの軟質層である。粒子はやや荒く、若干、第2層に類似している。

第4層は、第2・3層と比べると、より粘質度が増している。第2層より硬く引き締まっており、第3層よりやや色調的に茶味を増すようである。粒子は第2・3層と同様にやや荒い。7.5YR4/3。

第5層は、層質的には第4層と非常に類似しているが、若干、色調的に第4層より茶味がなくななるようである。7.5YR5/6。

第2層から第5層までは、基本的に山からの土砂流出物堆積層と考えられる。この層中にローリングを受けた土師器等が含まれている。

第6層は、基本的に第7層の軽石が搅乱・流出したものであり、その流出に伴う砂利等がラミナ状を呈している。以下6層に分層することが可能である。

a層は、粘質を若干伴い、粒子はやや荒く、軽石が碎けた粒子も多く認められる。硬く引き締まっており、上部層は、第5層の流出の際に削り取られ、搅乱を受けている。

b層は、粒子のやや荒く、a層に比べたら軟質が増すようである。

c層は、a層と比較して、色調的にやや茶味が増すようである。層質的にはa層に類似しているが、粒子がやや細いようである。

d層は、第7層の軽石が碎けた状態のものが堆積しており、粒子はやや荒い。やや硬く引き締まっている。

e層は、黒褐色の土層であり、 $2 \sim 3$ mmと薄い層である。粒子はやや細かく、軽石が碎けた粒子はほとんど確認することが出来ない。

f層は、層質的にはa層に類似しており、a層と比較して若干、粒子が荒いようである。軟質層でa層より色調的にやや茶味を増すようである。

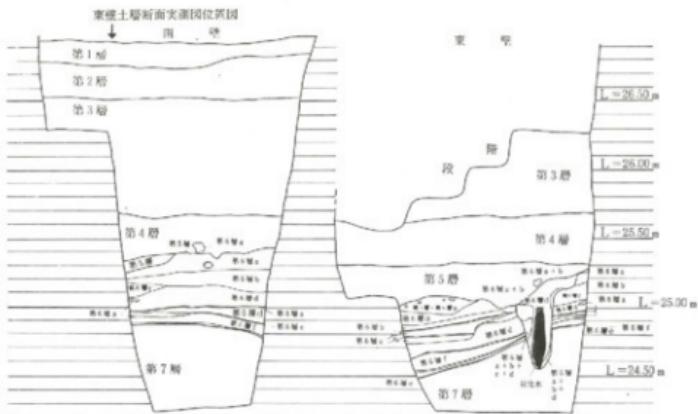
第7層は、軽石層である。 $5 \sim 10$ cm大の軽石が厚く堆積しており、下部にいくに従いその軽石の大きさも増していく。色調的にピンク色が確認出来る。池田軽石の2次堆積と考えられる。

(2) 遺構 (第30図)

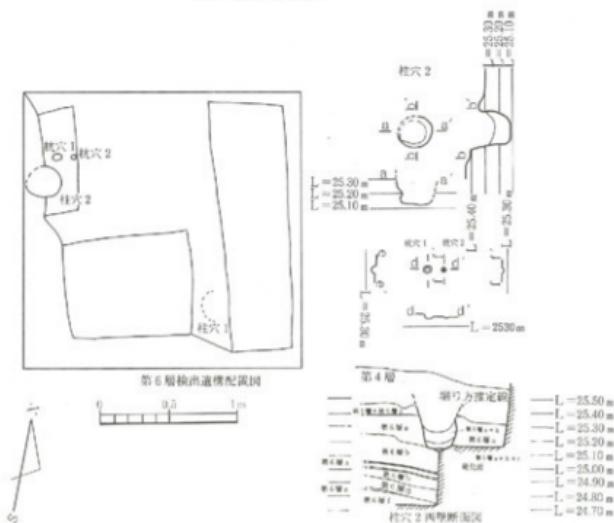
9トレンチでは、第5層下部（第6層a上部）において、柱穴と杭穴をそれぞれ2穴ずつ検出することが出来た。以下、柱穴、杭穴の順で説明していく。

a. 柱穴について

2穴の柱穴は、東壁と西壁の壁面でそれぞれ検出した。東壁の柱穴を東壁土層断面図の観察によ



雨墳・東壁土層断面図



第30図 9 トレンチ南壁・東壁土層断面図・第6層検出遺構配置図 (S = 1 / 40)



第31図 9トレンチ出土遺物実測図 (S=1/3)

第8表 9トレンチ出土遺物観察表

回番	取上場	残存法量	器種	部位	色 ①	色 ②	色 ③	色 ④	粘土粒	風紋	調査	その他の	層序	総合関係
1	一般 ①	破片	「成川式」 壺形土器	側部 底部 部	HOYR5/3 SYR3/2	10YR8/3 10YR6/3 7SYH3/1	-	-	細砂粒を 含む	① ② ③ ④	⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ナダ, ハケメ ヨコナデ	傾きギモン ハケメ10~11本/cm	第3層	
2	一般 ②	破片	青磁瓶	口縁部	25GY6/1	25GY6/1	10YT/1	-	灰色の磁 精良	-	⑨ 施施 施施 施施	傾き若干ギモン	第3層	

り考察していくと、掘り込み面は搅乱層である第5層により失っている。柱穴の埋土は、第6層のa層+b層+c層が混在したものである。柱穴内に長さ約40cm程、柱材が炭化した状態で残存しており、これより、柱材の直径は約10cmから13cmを計るものと推測出来る。なお、掘り方は段掘り状を呈している。

柱穴2は、直軸26cm、短軸22cmを測る楕円状である。掘り込み面は第4層により失っている。柱穴下場には、砂利を含む硬化面が確認された。掘り方は柱穴1とはやや異なる形態を呈している。埋土は、検出面上層の第4層と第6層a層+b層が混入し、柱材は残存していない。

杭穴は、柱穴2の北側に2列東西に並んだ状態で検出した。杭穴1と杭穴2の間は約6cm程で杭穴1の方が若干、杭穴2より大きめである。杭穴1は長軸6.5cm、短軸5cmであり、杭穴2の直径は約2cmを測る。掘り込みは杭穴1・2とも浅く、約2~3cmである。検出面は柱穴2と同じレベル上であった。2穴の杭穴には、第6層a層+b層を主とする層が埋土として入り込んでいる。

9トレンチで検出された柱穴と杭穴を掘り込んだ時期は、時期が推測出来る橋本礼川遺跡の基準層位と対応できる鍵層が検出できなかった為不明である。第7層の軽石層は、池田湖を起源とする池田シラス層の搅乱層と推測出来る。

なお、9トレンチの周辺には、正平山光明寺が建立していたという説があり、炭化した状態で検出した柱材や柱穴・杭穴は、その廟寺に関連する建物に関連する可能性もある。今後の9トレンチ周辺の再調査が望まれよう。

(文責 錦田)

(3) 出土遺物 (第31図)

9トレンチからは、総数14点の出土遺物があり、いずれも搅乱層からの出土である。そのうち2点の図化を行った。

1は古墳時代壺形土器胴部突帯部と考えられる。外面突帯部下はハケメ(10~11本/cm)が施工され、突帯部はヨコナデが施される。

2は青磁口縁部である。磁胎はやや灰色を呈する。内外面ともにやや大きめの貫入が入る。

1, 2ともに3層から出土し、3層自体が搅乱土であると考えられることから、混在の可能性が大きい。

(文責 下山)

第10節 10トレンチの調査

(1) 層位（第32図）

第1層は、耕作土層であり、粒子はやや荒くサクサクしている。7.5YR3/1・2/1。

第2層は、粘質性に富み、軟質でサクサクしている。軽石や小礫等を多く含む。5YR3/1。

第3層は、粘質性が強く、引き締まっている。小礫や軽石を含み、下部にいくに従い黒味を帯びていくようである。白磁破片資料が出土している。5YR3/2。

第4層は、砂利層であり、粒子はやや細かい。

第5層は、水気を多く含み、非常に硬い土層である。軽石や小礫等を多く含む。5YR4/2。

第6層は、非常に水気を多く含み、粘質に富んでいる。炭が混在し、やや硬く引き締まっている。

第7層は、第6層より黒味を増す。層質的には第6層に類似している。第8層は、色調的には第6層に類似するが、軽石や小礫等は含まない。層質的には第6層に類似。

第9層は、粘質土層であり、やや硬く引き締まっている。7.5YR5/6。

第10層は、粘質土層であり、非常に硬く引き締まっている。遺物包含層である。5YR5/8-6/8。

第11層は、非常に硬く引き締まっている。上部層には鉄分が付着し、下部層には「紫コラ」のシルト層がブロックの状態で点在している。

第12層は、粘質性に富んだ硬質土層である。軽石等を含み、「紫コラ」のシルト層が確認出来る。

第13層は、非常に粘質に富んでサクサクしている。5cm大の軽石や粘土、小礫が風化したものが多く含まれている。5YR5/4。

第4層（砂利層）があることから、時代は不明であるが、10トレンチ北側の河川がはん乱・流水方向が変化したと考えられる。

第10層・11層・12層において非常に硬く引き締まっている面が確認出来たため、第10～13層のそれぞれ上面において、20cm四方の区画を設け、区画内で3ヶ所土礫硬土試験を行った。その測定値の平均値を支持強度P値に換算し、右記した。表によると第11層上面が最も硬化しており、次いで第12層・10層の順で数値が高い。硬化面の時代は不明であるが、「紫コラ」のシルト層が検出されたので、「紫コラ」

降下以降の時期で、硬化面は家屋の土間の可能性もある。なお、

硬化面の第10層中から高台付土師器碗が出土している。

支持強度P値

（文責 錦田）

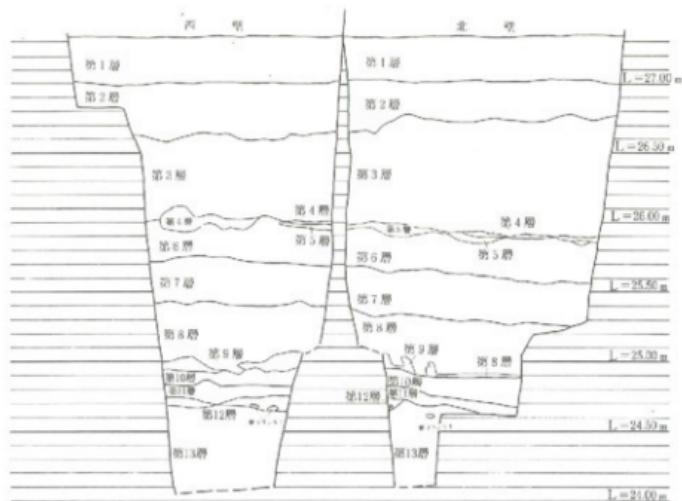
(2) 出土遺物（第32・33図）

10トレンチからは、総数45点の出土遺物があり、いずれも包含層からの出土である。そのうち、7点の図化を行った。

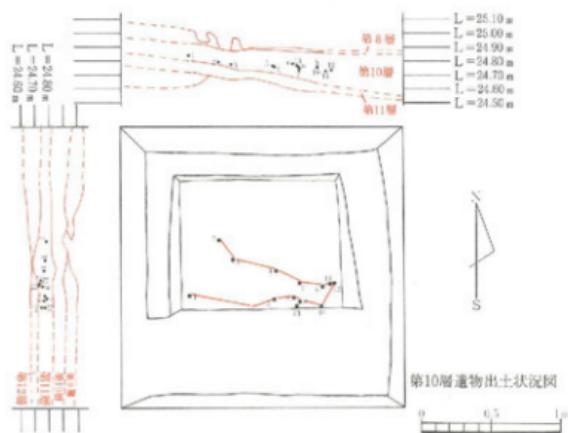
1は土師器杯で、底部と口縁部が残存する。高台を有し、口縁部に向けてやや外反しながら立上るものと思われる。高台内見込み部には回転ヘラケズリが施されたのちナテ調整が行われたものと思われる。

2, 3は白磁皿で、2は胴部を、3は底部を欠失している。2の内面見込み部には一条の輪状の文様が施されている。2, 3ともに口縁部は若干外反する。2の底部は、高台を有し、疊付部および高台内面見込み部は無釉である。

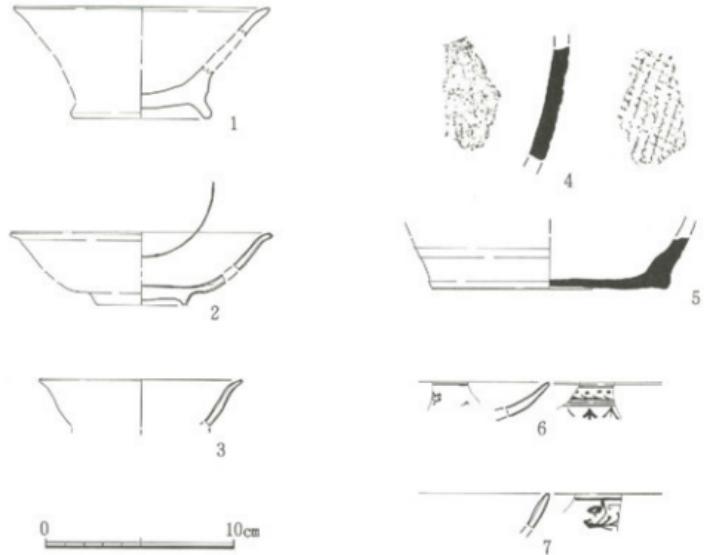
	a	b	c	d	e
第10層	7.04	10.43	16.56	11.59	10.35
第11層	41.82	54.44	34.24	27.42	29.32
第12層	32.31	27.74	16.73	14.15	23.44
第13層	2.83	4.53	4.07	3.68	3.04



北壁・西壁土層断面図



第32図 10トレンチ北壁・西壁土層断面図・第10層遺物出土状況図 (S = 1/40)



第33図 10トレンチ出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

第9表 10トレンチ出土遺物観察表

回数	直上名	残存部数	器種	部位	色①	色②	色③	色④	土粒	目付	調整	その他	層序	層合關係
1	1	高台付 土罐破片 (後元) 7.2cm	高台付 土罐破片		7SYR8/4 SYR8/2	7SYR8/4	7SYR8/4	7SYR8/4	細砂粒を 含む	⑥ ⑦ ⑧ ⑨	ナデ ⑩ ⑪ タケツリのナデ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ タケツリのナデ ナデ ⑯ ⑰ コトニア	背高不明 反転	第10層	
2	一般 2.3 層③	1/10 直存 1.1cm 10.8cm (後元)	青白 直筒土器 底	口縁部 部	7.5GY8/1	7.5GY8/1	10YR8/1	7.5GY8/1	粗良な磁 胎	-	施釉 ⑭ ⑮ 無釉 ⑯ ⑰ 施釉	高台内無釉 背高不明 反転	第2また は第3層	
3	一般 2.3 層③	1/10 直存 1.1cm 10.8cm (後元)	白磁直形 土	口縁部	10YR8/1	10YR8/1	10YR8/1	-	粗良な磁 胎	-	施釉 ⑭ ⑮ 無釉 ⑯ ⑰ 施釉	反転	第2また は第3層	
4	一般 ①	破片	直 器 餅	漆	2SYT/2 SYT/1	2SYT/2 SYT/1	SYT/1	-	細砂粒を 含む	⑥ ⑦ ⑧ ⑨	マヌカ 子目タタキ	傾き上下ギモン	第2また は第3層	
5	一般 2.3 層③	1/9~ 1/8存 1.1cm (後元) 12.5cm	直筒器底 底	器	SB5/1	SYR8/2 10YR8/1	7SYR8/2 10YR8/3	細砂粒を 含む	⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ナデ	⑭ ⑮ ナデ ナデ ナデ ナデ	底径若干ギモン	第2また は第3層		
6	一般 2.3 層③	破片	直 付 器	口縁部	粗 陶 器	粗 陶 器	粗 陶 器	-	粗良な磁 胎	-	施釉 ⑭ ⑮ 無釉 ⑯ ⑰ 施釉	施釉逆立網文 を組み合せた 絞付 ⑭ ⑮ 植彌草花文	第2また は第3層	
7	一般 2.3 層④	破片	直 付 器	口縁部	粗 陶 器	粗 陶 器	粗 陶 器	-	粗良な磁 胎	-	施釉 ⑭ ⑮ 無釉 ⑯ ⑰ 施釉	草花文の一部と思 われる 絞付が施される	第2また は第3層	

4は須恵器壺または壺形土器胴部で、外面には格子目タタキが、内面はナデ調整が施されている。

5は須恵器壺形土器底部である。

6は染付皿口縁部、7は染付碗口縁部である。6は横線、網文、連点文が組合わされている。

7は外面に草花文の一部が見られる。

(文責 下山)

第11節 11トレンチの調査

柳田川の北岸に 1×2 m の調査区を設定し、掘り下げを行った。河川のはん乱地と考えられる地点である。

(1) 層位（第34図）

第1層は、表土層であり、砂利や小礫等を多く含んでいる。河川工事の際に重機等が往来した為、非常に硬く引き締まっている。5YR2/1。

第2層は、粘質土層で砂利や礫を多く含み、引き締まっている。粒子はやや細かい。10YR4/6。

第3層は、層質的には第1・2層に類似している。貝殻も確認出来る。色調的には第1層に類似し、粒子は非常に細かい。5YR2/2。

第4層は、軽石が細かに碎けた状態で堆積している。貝殻や礫等も含まれ、全体的にサクサクしている。軽石はおそらく池田湖にその起源がたどり得である。N8/0。

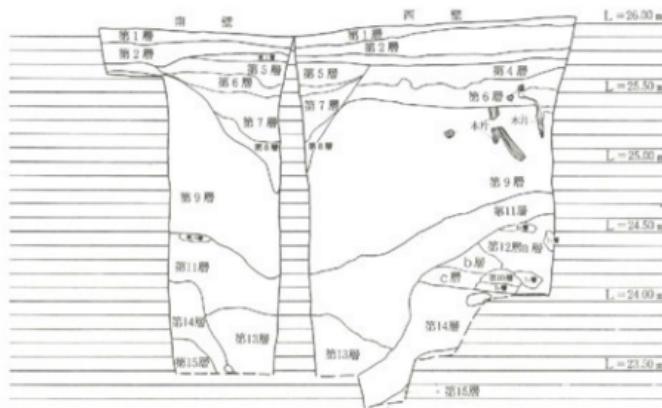
第5層～第8層は第4層から掘り込まれた擾乱穴の埋土である。

第5層は、粘質性に富み、やや軟質層である。粒子は非常に細かく、色調的には第2層に類似している。水気を多く含み、礫も確認出来る。10R3/4。

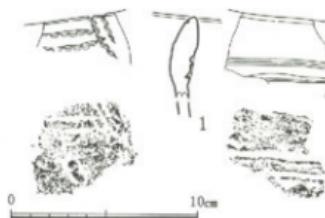
第6層は、粘質性に富み、硬く引き締まっており、粒子は非常に細かく、層質的には第3層に類似している。樹根や木片等が多く確認出来る。5YR1.7/1・2/1。

第7層は、粘質を多く含み、やや軟質層である。粒子は細かく、色調的には第5層よりやや茶味を帯びている。礫を多く含んでいる。5YR3/3。

第8層は、第4層の軽石と第6層・7層が混在したものである。下部層には石が多く入り込んでいる。10YR7/1・6/2。



第34図 11トレンチ南壁・西壁土層断面図 ($S = 1/40$)



第35図 11トレント出土遺物実測図 (S=1/3)

第10表 11トレント出土遺物観察表

図番	系上	残存法量	名種	部位	色④	色⑤	色⑥	色⑦	胎土粒	胎形	調整	その他の	層序	検査結果
1 一概 ①	破片	指宿式土器	口縁部	7.5R4/6 10R5/2	7.5R4/6	7.5R4/6			細砂粒を含む 砂粒を含む	④⑤ ⑥⑦	モチマツ、 ナデヤセ、メ ブ、ナガ、 ヤマツ、ナラ	傾き若干ギモン	第9層	

第9層は、粘質土層でやや硬く引き締まっている。粒子は細かく、砂利も含まれており、炭木も若干、確認出来る。第7層より若干、茶味を帯びる。2.5YR3/3。

第10層は、川砂利層であり、粒子は非常に細かい。2.5YR3/1・4/1。

第11層は、粘質土層であるが、第9層と比べるとやや水気が少ない。粒子は細かく、やや硬く引き締まっている。

第12層は、粒質土層であり、分層が可能である。a層は、粒子は細かく硬く引き締まっている。b層は、a層と色調は一緒であるが、礫・砂利の保有量でa層と分層が可能となった。c層は、b層より軽石を多く含んだ層である。第12層のレベルにおいて、北壁と東壁で北西から東南に蛇行する河川跡が確認出来る。

第13層は、川砂利層に類似しているが、やや粘質を伴いサクサクしている。粒子は他の層に比べると荒い。第11層より赤みを帯びる。5YR4/4。

第14層は、粘質土層であり、水気を多く含み、粒子は非常に細かい。層中に、灰褐色(5Y6/1)と赤褐色(10R4/8)の別層がブロックで確認出来る。やや引き締まっている。

第15層は、粒質土層で水気を多く含み、非常に硬く引き締まっている。色調は第14層の灰褐色の色が主体を占めている。

(文責 鎌田)

(2) 出土遺物 (第35図)

11トレントでは、総数15点の出土遺物があり、そのうち1点を図化した。

1は縄文時代後期に該当する「指宿式土器」と呼ばれるものである。「指宿式土器」は現在の国指定史跡指宿橋半礼川遺物包含地を標識遺跡とする。第6層の一般遺物である。

外面には平行する2本の沈線文が施され、口縁部内面には二枚貝の腹縁部で刺突した文様が施されている。

(文責 下山)

第IV章 調査の成果

ふるさと農道整備事業に伴う遺跡確認調査においては、南北600mの区間の地形を考慮した上で、便宜上、南から北へ1～11トレンチの仮設定を行った。その内、最南端の1トレンチでは地権者と協議がうまくいかず調査をすることが出来なかつたが、残りの10ヶ所のトレンチにおいて、各トレンチ毎にそれぞれ成果を上げると同時に多くの問題点も得ることが出来た。

以下、時代毎、もしくは遺構毎に述べていく。

縄文時代——11トレンチの攪乱層である第6層中から出土した「指宿式土器」の1点のみである。この「指宿式土器」は国指定史跡指宿橋牟礼川遺物包含地を標識遺跡とするものである。攪乱層一般の土器であるが、これにより「指宿式土器」を保用する縄文時代晩期の集落が、11トレンチの西側に位置する山間や台地、もしくは11トレンチ周辺に存在したことが伺えられるであろう。

弥生時代——3トレンチの第13層（橋牟礼川遺跡基準層序第10層）中から、弥生時代の壺形土器の底部破片資料が1点出土した。（第13図）また、第13層中から掘り込まれた可能性がある不定形な土壙も検出された。今後の3トレンチ周辺の調査によって、弥生時代の集落の一部を確認することが望まれよう。

古墳時代——古墳時代の遺物を出土したトレンチは2・3・4・7・8・トレンチである。特記すべき点としては、4トレンチ第9・10層（橋牟礼川遺跡基準層序第8・9層）中から、口縁部がやや内湾し、口縁部下に1条の突帯を施す略完形の壺形土器が、土圧により押しつぶされた状況で出土した。この土器は「成川式土器」の小様式の中の「従貢式土器」として認定されているものである。また、この土器を包含している第9層中から掘り込まれた不定形な土壙も検出した。土壙内に充満している埋土は、黒茶褐色で粘質を非常に持ち水気を多く含む層であり、炭も含まれていた。4トレンチの調査区が狭いことから土壙の全体形状の把握は出来なかつたが、調査中、住居跡内の「炉」という見解もあり現場で検討したが、何に付隨、関連する土壙かという点については、結論は出なかつた。今後の4トレンチ周辺の再調査に期待が持たれる。なお、これらの出土により、南追田遺跡も東側に位置する橋牟礼川遺跡と同様な古墳時代の集落が存在していたことが推測されよう。

また、上記した3トレンチの第13層中から掘り込まれた土壙も明確な壁の立ち上がりや、掘り込み面が認識することが出来なかつた為、古墳時代に伴う土壙の可能もあることを付記しておく。

平安時代——南追田遺跡の2～8トレンチにおいて、貞觀16年3月4日（西暦874年3月25日）に開闢岳を起源とするテフラ「紫コラ」及びその二次堆積層が厚く堆積していることが確認された。2・3・4トレンチの「紫コラ」層上面において、海岸へ蛇行・流出する河川跡を検出した。河川の幅は確認された面だけで70cm～100cmと様々であり、2トレンチと3トレンチの河川はその流出

方向から推測してトレンチの東側で合流している可能性がある。これらの河川跡が山裾の湧水流出により形成されたものなのか、もしくは、西暦874年の噴火直後の降雨に伴い、河川が山裾から幾本も形成され流水したことも考えられる。しかし、3本の河川跡の時期および、それぞれの共時性については不明である。また、全ての河川跡の埋土は「紫コラ」層の上層が充満している。

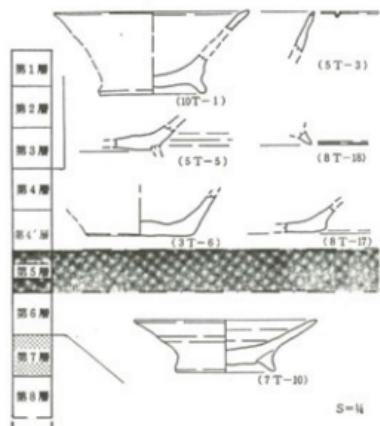
また、遺構としては、6トレンチ第5～6層中から「紫コラ」層に掘り込まれた溝状遺構と杭穴が挙げられる。中世黒色帯の第4層が掘り込み面の上部にあることから、これらの時代は平安時代から中世以前のものと考えられる。7トレンチにおいても同じような層中から掘り込まれたビット状遺構がある。

5トレンチの「紫コラ」直下層は川砂利層であることから、5トレンチ周辺は西暦874年3月25日以前までは、河川があったことが伺える。

出土遺物は、西暦874年の「紫コラ」を上下挟んだ遺物包含層中から、それぞれ多くの遺物が出土している。まず「紫コラ」直下層（橋半礼川遺跡基準層序第6層）の遺物包含層から出土した遺物を土師器を中心としてみてみる。（下図を参照）

特記すべき点として、7トレンチの「紫コラ」直下層から出土した高台付の土師器皿形土器が挙げられよう。現在において有高台皿は、君畠遺跡で検出されたSE614内一括資料にその姿が見出され、¹⁰ 太宰府編年によるその年代観は、西暦835年から西暦874年頃とされている。¹¹ SE614内で出土している有高台皿は、その器形から鑑みれば高杯とよべるものであり、脚部の高さは4.0cmを測るものである。

今回、7トレンチで出土しているような脚部高が短い有高台皿の出現は、太宰府編年によるとSK678以降にその姿が見出され、その年代観は9世紀終から10世紀初頃とされている。第25図-10は西暦874年の「紫コラ」の降灰以前の堆積層中から出土していることから、少なくとも、この有高台皿は西暦874年の以前のものと言えよう。よって、指宿地方には、遅くとも9世紀第3四半期以前には、このプロポーションとして完成されたものが出現していることが伺えよう。¹²



「紫コラ」上下層出土の土師器

次に「紫コラ」直上層の遺物包含層からの出土遺物をみてみる。

3・5・8・10トレンチから、高台付土師器碗や杯、皿が出土している。

10トレンチの高台付碗は、何らかの建物施設に伴う硬化面（土間？）上面において出土している。その出土層上下より、年代観が把握出来るような聞聞伝の火山灰や、中世黒色帯が確認されていない。よって、高台付碗の年代観については、そのプロポーションからの検討や10トレンチ周辺の再調査等により追求していく必要があろう。なお、

3トレンチより磁器壺形土器も出土している。

中世——中世黒色帶層中からは2~8・10トレンチから数多くの出土遺物がある。2・5トレンチより青磁碗が出土し、その内、5トレンチの青磁碗は輸入磁器と考えられる。また、その他に土師器の碗・杯・皿・甕形等土器が出土しており、遺跡全域において、中世（鎌倉～室町時代）の遺物が認められる。

遺構としては、2・3トレンチから南北に伸びる古道を検出した。おそらく、2・3トレンチを検出した古道は同時期のものと考えられる。

なお、2トレンチ中央部にて、T字に分岐し、西側の山手に伸びる古道も確認出来た。

また、5トレンチより中世の黒色帶層中から「紫コラ」層に掘り込まれている柱穴を5穴検出した。（第21図）5穴の埋土色の若干の違いから、5穴の柱穴の2分類が可能である。1つは柱穴2・4、もう1つは柱穴1・3・5である。この埋土色の若干の違いから導き出された柱穴の分類が、存続の時期的な差を示しているか、もしくは、柱穴の掘り方の深さの違いから生じた結果かは不明である。よって、この柱穴の2分類の時期的前後関係や掘立柱建物のプランまで言及することが出来なかった。しかし、西側に山裾を隣接する周辺に、中世（鎌倉～室町時代）の何らかの掘立柱建物の施設があることが確認出来たことは大きな成果であり、今後のトレンチ周辺の調査により、中世集落の一部を垣間見ることが出来ると考えられる。

近～現代——近世以降の遺物としては、2・3・5・8・10トレンチより白磁碗、陶器碗、陶器鉢、染付蓋付碗等が出土している。出土層位は、攪乱層や山からの土砂流出物堆積層中からのものが多いため、2・3トレンチから出土した白磁碗や陶器皿、陶器碗等は、いわゆる薩摩焼系統の陶磁器であると考えられる。

正平山光明寺廃寺について——南追田遺跡の10トレンチと11トレンチ間に流れる柳田川の北西部に「テランヤマ」と称される小高い山（第2図参照）があり、その山中が明治時代の廃仏毀釈により姿を消した正平山光明寺の寺跡とされている。⁴⁶ 正平山光明寺は697年（白鳳年間）に定慧和尚⁴⁷により開山され、その後、荒廃していたのを島津元久公が応永年間（1394～1428年）に新しい寺を建てたとされている。また、その後、荒廃していたのを住寺線山和尚によって再興されているとされる。697年の開山から2度に渡る再興に伴う関連施設が、柳田川の両岸の調査区で確認出来る可能性があった。

9・10トレンチにおいて、正平山光明寺に関連すると考えられる遺構を確認した。

9トレンチにおいて、2穴の柱穴と2穴の杭穴を池田軽石層の2次堆積層上面において検出した。（第30図）柱穴の内、1穴は柱材が炭化した状態で検出され、柱材の直径は約10cm～13cmを測り、残存部分は約40cmを測る。これら柱穴と杭穴の掘り込まれた時代・時期は、掘り込み面が後世の攪乱（土砂流出）により失っていることと、鍵層となる火山灰層を確認することが出来なかつたため不明である。池田軽石の2次堆積層も時代を確定することは出来なかつた。

10トレンチにおいては第11層上面をピークとし、第10層から第12層にまで至る硬化面を調査区内

で確認した。^四（第32図）第12層中に「紫コラ」のシルト層があることから、これらの硬化面は西暦874年を下らないと考えられる。おそらく、何らかの施設に伴う硬化面と考えられる。

9・10トレンチで検出された遺構の存続時期や時代は不明であるが、10トレンチの硬化面は西暦874年を下らないであろう。また、10トレンチの炭化している柱材から、ある程度の年代観が、今後の分析により判明すると思われる。

今後「テランヤマ」と称される地点周辺の調査が望まれ、その成果次第では、鹿児島県内でも古い時代にあったと考えられる廃寺の伽藍配置やその全体像を把握することになるであろう。

7m×600mの農道予定地内を2×2mを基本とする調査区を10ヶ所設定し調査を行ったが、西側の山からの土砂流出物堆積が厚いところでは、狭い調査区内において2m以上掘りようやく文化層にたどりつくトレンチもあった。

南追田遺跡における10ヶ所のトレンチの発掘調査の成果により、今まで未開の地であった西側の山裾周辺にも、国指定史跡指宿橋牟礼川遺物包含地周辺と同様な、長い期間にわたる人々の生活の痕跡を確認することが出来た。

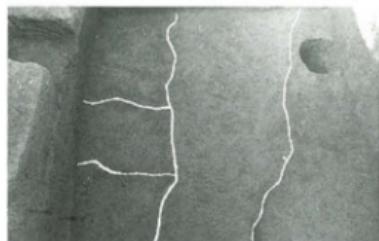
狭い調査区内でも比較的良好な資料や遺構等が検出され、農道予定地内には、縄文時代から中世に至るまで良好な遺物包含層が厚く堆積しており、今後のこの周辺の調査の成果により、縄文から中世までの集落の姿を垣間見ることが可能となるであろう。今後も引き続き南追田遺跡内や周辺の調査が望まれる。

（文責 錦田）

- (1) 鹿児島県埋蔵文化財センターの中村和美氏より御教示を頂いた。
- (2) 太宰府市教育委員会「太宰府条防跡Ⅲ」「太宰府市の文化財第8集」1983
福岡県教育委員会 「筑紫都太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(3)」
福岡南北バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第6集 1977
- (3) 下山 覚氏より御教示を頂いた。
- (4) 森田秋弘 「廃仏毀釈」によって消された寺々—指宿地方— 1975
- (5) 定慧和尚は、藤原鎌足の子息で、唐に27年間滞在し、白鳳七年帰朝して法想宗を伝えた人であると森田秋弘氏は記している。
- (6) 2×2mの調査区内において、実際に硬化面の第10層を検出したのは段掘りを行った為2×1mの範囲にとどまった。よって、硬化面の実際の平面的な広がりは把握できなかった。



2 レンチ北壁第5層検出の島路
(黒色帯層と粘質層の境)



2 レンチ第5層中検出古道 (南側より)



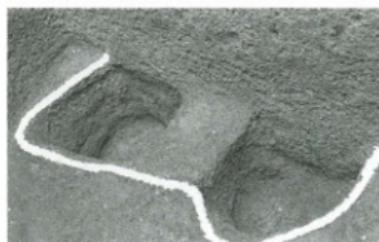
2 レンチ完堀状況 (東側より)



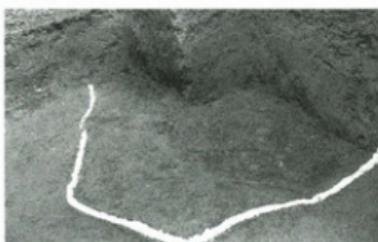
3 レンチ北壁・西壁土層堆積状況
(東側より)



4 レンチ北壁・西壁土層堆積状況
(東南側より)



3 レンチ第13層検出の土掘堀り方状況
(北側より)

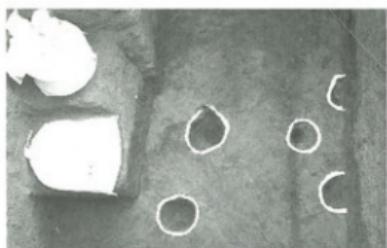


4 レンチ第9層検出の土掘検出状況
(北側より)



4 レンチ第9・10層遺物出土状況図
(西側より)

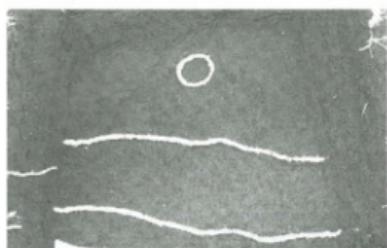
P L 1, 2 · 3 · 4 レンチ調査状況



5 トレンチ第4層検出の柱穴の掘り方状況
(東側より)



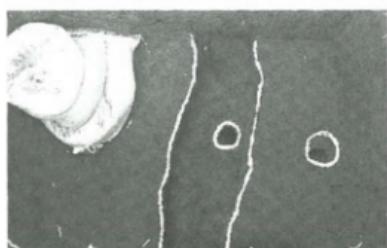
5 トレンチ北壁土層堆積状況



6 トレンチ第8層検出の遺構平面状況
(西側より)



5 トレンチ柱穴4の掘り方・埋土の入り方状況



6 トレンチ第8層検出の溝状遺構・杭穴の掘り方状況
(南側より)



7 トレンチ東壁土層堆積状況と
ピット状遺構の掘り方状況



7 トレンチ第10層遺物出土状況 (南東側より)



7 トレンチ第8層出土の有高台皿出土状況



8 トレンチ第8層出土遺物状況図（西側より）



8 トレンチ第11・13層出土遺物状況図（南側より）



9 トレンチ東壁土層堆積状況



9 トレンチ第6層柱穴・杭穴検出状況



9 トレンチ柱穴1の掘り方状況と
柱材の炭化検出状況
(西側より)

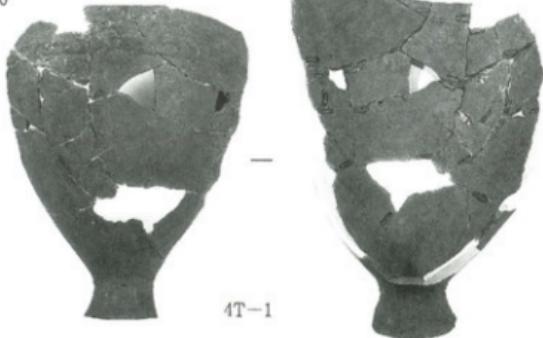
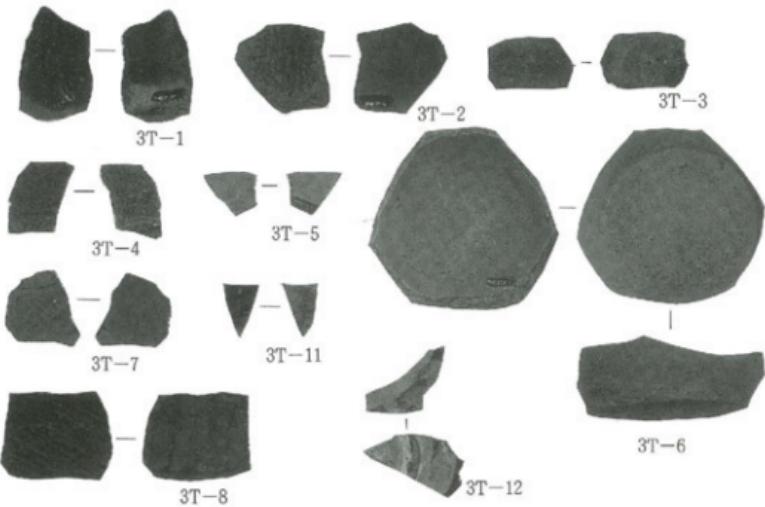


9 トレンチ柱穴・杭穴の掘り方状況
(東側より)



11 トレンチ西壁・南壁土層堆積状況
(北西側より)

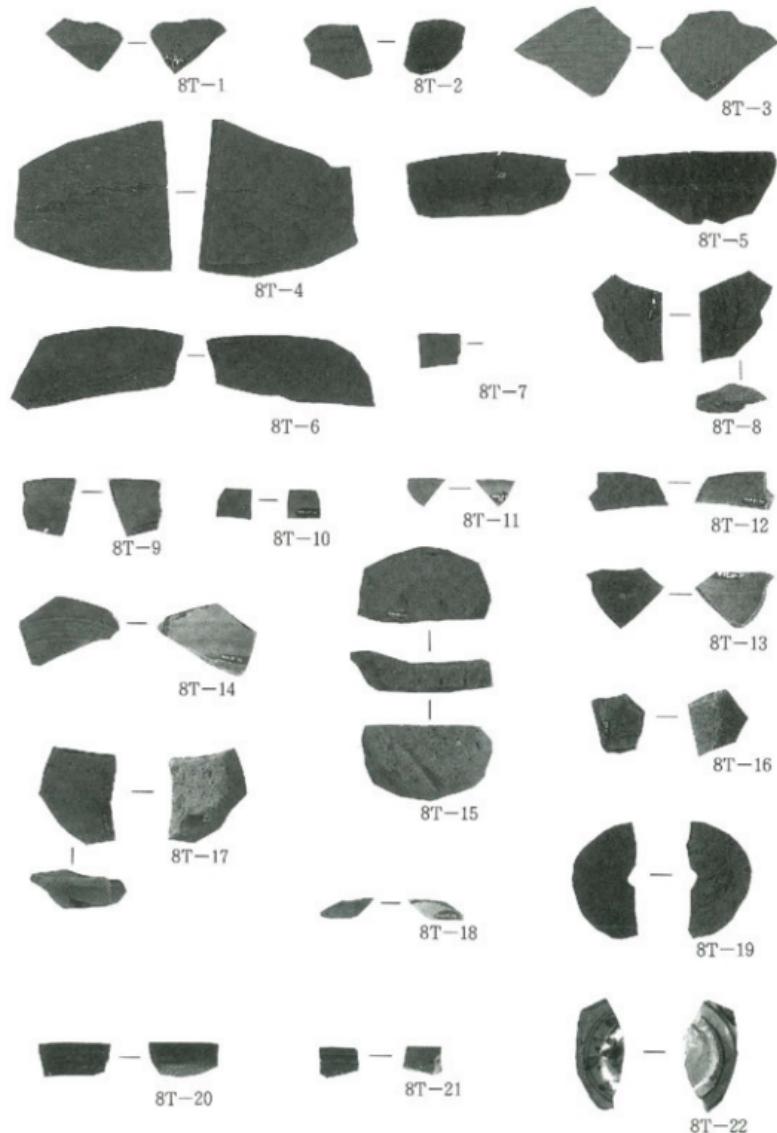
P L 3. 8・9・11トレンチ調査状況



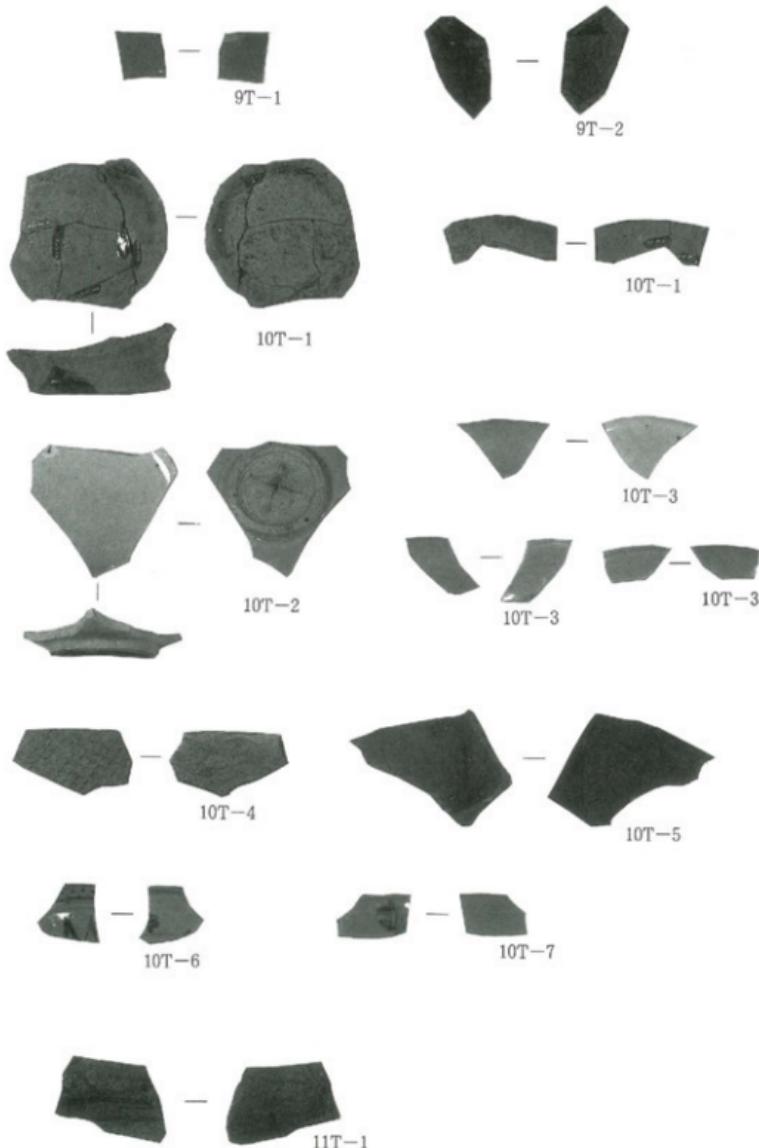
P L 4, 2・3・4 トレンチの出土遺物



P L 5, 5・7 トレンチ出土遺物



P L 6. 8 トレンチ出土遺物



P L 7, 9・10・11トレンチ出土遺物

報告書抄録

ふりがな	みなみさこだいせき						
書名	南追田遺跡						
副書名	ふるさと農道整備事業に伴う確認調査報告書						
卷次							
シリーズ名	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第15集						
編著者名	下山 覚・鎌田洋昭						
編集機関	指宿市教育委員会						
所在地	〒891-04 鹿児島県指宿市十町2424 TEL 0993-22-2111						
発行年月日	西暦1994年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東絰	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
みなみさこだい 南追田	鹿児島県指宿市 十町南追田	46210			1993.10.19～ 1993.12.22	45.25	ふるさと農道 整備事業に伴 う事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
南追田	集落跡	弥生	土 墳 1基	壺形土器	西暦874の開闢岳の火山灰 「紫コラ」下層より、土師器 有高台遺が出土。今までの太 宰府編年の年代観を若干見直 す必要性がある。 古墳・平安・中世の集落の 一部を確認。		
		古墳	土 墳 1基	成川式土器・須恵器			
		平安	溝状遺構 柱穴 杭穴 ピット状遺構	1基 2穴 2穴 1穴			
				土師器・白磁・青磁			
			中世	柱古 穴道			

<SUMMARY>

Key words : Minamisakoda-site, Hashimuregawa-site, alluvial fan. Mt.Kaimondake
Ikeda-cardera. Ibusuki-type pottery, Sasanuki-type pottery,
Hajiki dish with low stand, village of the Middle ages.

The archaeological site of Minamisakoda is located in Ibusuki-city, Kagoshima prefecture, at the southern most tip of the Kyusyu Island.

Also, the site is located on the west edge of an alluvial fan.

The topographical features of Minamisakoda-site were formed by volcanic layers from Mt.Kaimondake and Ikeda-cardera, as well as avalanche layers from the outerrim of the Ikeda-crater.

We set up 10 trenches on the line which was planned N-S direction for making road, and surveyed.

As a result, we found some layers which impiled relics dating anywhere from the Jōmon age to the Middle ages (Kamakura-period~Muromachi-period).

We obtained four major findings:

① We found Jōmon pottery (named Ibusuki-type because it was first recognized in 1919 at the Hashimuregawa, Ibusuki, archaeological site). We were able to conclude that there was a village on the site.

② We found Sasanuki-type, Kofun age pottery. Thus, we recognized that Kofun age people lived on the site, too.

③ We found Heian age pottery (named Hajiki) under a volcanic ash layer from the volcanic activity of Mt.Kaimondake on May 4 th, 874 A.D.

One of the pieces was a Hajiki dish with low stand.

The dishes form was first thought to belong to the stage ranging from the last quarter of the 9th century to the first quarter of the 10th century. We later recognized the dish style, however, as belonging to the 3rd quarter of the 9th century, because the dish was confirmed under the volcanic layer.

Thus, it is necessary that a part of the chronological plan be amended.

④ We found parts of a village of Middle age (Kamakura-period~Muromachi period): small path, a ditch, pits and old china wares named Seiji and Hakuji.

We conclude that Minamisakoda-site was composed of four different age villages based on this survey.

Original : Hiroaki Kamada

Translation : Satoru Shimoyama

Proofreading : Trevor Fencott

南迫田遺跡

平成6年3月

発行 鹿児島県指宿市教育委員会
指宿市十町2424
☎ 0993-22-2111

印刷所 中央印刷株式会社
鹿児島市春日町12番16号
☎ 0992-47-3300

THE REPORT OF THE
MINAMISAKODA ARCHAEOLOGICAL SITE

March 1994

CONTENT

- Chapter I Pre-Excavation Development.
- Chapter II Surroundings of the Site.
- Chapter III Survey of each Trench
- Chapter IV General View

SUMMARY

Reporter and Editor : S. Shimoyama, H. Kamada Published by The Board of Education of Idusuki-city Kagoshima Prefecture, Japan.